

「巻き込まれ親父の厄災」

作 藤次郎政秀

●エピソード、まるでW7…

閉鎖空間でオートバイにまたがったTYが

「こっちは準備いいわよ」

と言つて、バイクのアクセルを吹かす。ヘルメットの中のレシーバー越しに

『はいな姐さん』

IAから返事が来る。

「…チョットIA、換気扇ちゃんと回ってんの？なんか排気ガス臭いわよ！」

『ダイジョーブですよ、こちらはいつでも良いですよ。姐さんのタイミングでOKっす！』

「それじゃあ、行くわよIA！…3、2、1」

『ハイ！』

Y国際港コンテナ埠頭。大型トレーラーが大きく傾きながら急ハンドルを切る。するとトレーラーの荷台のハッチが開くと同時に一台のバイクが飛び出し、路面に着地して疾走する。

「…おっ、やってるな」

白山亭と書かれたワンボックスワゴン車でコンテナ埠頭に着いたHGとHY…その風景を見てHGが言った。

バイクはHG達の前を通り過ぎ、ライダーは埠頭にあるコンテナにある的に対して脇に吊っている拳銃を抜きざまに2発撃った。

「あー、当てちまった…」

カメラマンが頭を抱えた。

「カーツト!!」

撮影監督がハンドマイクで叫ぶ!

拳銃から発射された弾丸はコンテナにある的の真ん中に見事当たっていた。(弾はペイント弾です。作者注)

ライダーはバイクを撮影スタッフの前に止めると、ヘルメットを取った。バイクに乗っていたのはTY:疾走していたバイクはTYの私物:バイクスーツもいつもTYが着用している物:

「…どう?」

TYがドヤ顔で言う、撮影スタッフは各自財布を取り出し、「負けた:」「スゲーな」と口々に言いながらTYにお金を払う。TYは「毎度あり!」と言ってお金を受け取る。

続いてトレーラーが撮影スタッフの側に停車しIAが運転席から降りてくる。

「IA、やったよ!」とガッツポーズをするTY

「はい姐さん」と言、IAはTYとハイタッチをする。

お金を勘定しているTYの隣でIAがHGを見つけて

「ヤバっ、准尉…」

「なに?」

と言、IAが指さす方向を見たTYが「げえ!」と叫ぶ。

「二人とも何してる!」

とHGが怒鳴ると、TY、IAは小走りでHGの所に駆け寄る。

「何をやっとする?」

「いえね:撮影スタッフが『走るトレーラーの中からバイクで飛び出して、そのまま拳銃で

的に当てられるか』で賭けをしまして…」

「ほーお、それで？」

と言うH Gのこめかみがひくつく。T Yはそれを見てビビりながらも、

「はい、あの通りに…」

T Yはコンテナにある的を指さして言った。

「…そうか、まるで、地元（Y市）出身の有名劇画家の代表作… “W7” みたいだな…」

「本当ですね…わたしも准尉の書斎の本棚から借りて読んだことあるので、そう思いました！ 凄いわね！ T Y」

H Yが興奮して言うど、

「いや…それほどでも…I Aが上手くやってくれたので…」

T Yが照れる。

「ハハハ…これ任務で使えませんかねえ…」

とI Aがとりつくように言うど、H Gはしかめっ面をして

「何を言つとる！ 使わないようにするのが任務だ…我々は派手なアクションは極力しない！ 安全と命第一！！」

「はあ…」

と言って、2人供項垂れた。

「これは、H G社長」

芸能事務所〇×エージェンシー社長のM KがH Gの所に来た。

「白山亭デリバリーサービスのご利用ありがとうございます。M K社長、ご注文の昼食を配達に来ました」

「それは、どうも…それにしても、お宅のT Yさん凄いわね、いつそ、ウチの事務所でアク

シヨン女優として契約してほしい位…」

「そうですか…それは光栄です（社交辞令…社交辞令…）。それは、そうと今日はここで自宅のアクション女優のCEさんの撮影では？」

「そうなのよ、CEのカメラテストに付き合ってもらっちゃった訳…」

「成程」

「ちよつとあんた達、手伝って、量多いんだから」

HYがワンボックスワゴン車のドアを開けて、配達用のフードコンテナを引っ張り出しながらTYとIAを呼ぶ

「「ハイ」」

TYとIAがHYの呼びかけに応じて軽ワゴン車まで走っていった。

ワンボックスワゴン車から折り畳み机を出して、その上にフードコンテナやポッド類を出した。

その場で受け取りに来た撮影スタッフや俳優陣、エキストラに対して出前のサンドウィッチとコーヒーを手渡す。

それを見ながら、MK社長はHGとコーヒーを片手に話をしていた。

「この現場では、オタクのデリバリーサービスも頼めるからありがたいわ」

「はは、白山亭ならびに碓屋の経営者として御最前にしていただいて有難いです。それで、CEさんのその後の様子はどうです？」

「それなのよね、CEのストーカーより脅迫状が届いて以来、本人が怖がって演技にも影響出ちゃって撮影スケジュールが押されてるのよね…アクション女優なのにメンタルが弱いのがネックね…」

「うちのTYの話では24時間CEさんのマンションの部屋に泊まり込んで警護していますが、その後ストーカー被害や脅迫状の類も止まったと報告を受けています」

「うーん、ストーカーもTYちゃんの影響しているのかな？IMのIYちゃんみたい…」

「そういえば、うちのIYもIMさんのストーカー被害対策に張り付いていますが…、IYの報告では、先日ストーカー犯を捕まえて警察に引き渡したので、そろそろ任務を解いて欲しいのですが…」

「あれ？IYちゃんは返したわよ！」

「？」

「あー、IMの事だから、また我儘言っつてIYちゃん引き留めてるんだ…ごめんなさいね。IMが引き留めてる分、ウチが払うから」

「そういう事ですか、そちらのIMさんとウチのIYは仲がいいですからね…あんまり親密になるとそれもまた困りものですね」

「そーなの、ある程度はビジネスに徹しないとね」

「はい、IYとIMさんには私から言っておきますよ」

「ありがとう、HG社長…IMはなぜかあたしより、HG社長の言うこと聞くから」

「それは、私が他社の社長だからですよ。それだけIMさんはあなたの事を信頼しきっていると思いますよ」

「…そうならいーけど」

HGとMKがコーヒー片手に話しているのを見たCEは、昼食の配達を終え、片づけを手伝っているTYに

「うちの社長（MK）と話しているのが、あなたの会社の社長？」

「そうですよ」

「ダンディーで結構いい男ね…IMがいつも嬉しそうに話をしているのを聞いてたから、気になったのよ」

とCEが言っているのを聞いて、TYは「はは…（普段のオヤジ臭さを視たら幻滅するだろうなあ…）」と苦笑いした。

CEが出演する映画は、IMが人質になった数年前のフェリー事件（『巻き込まれ親父の突入』参照）を元に作成されたサスペンスドラマで、視点が人質役の人気歌手IM（本人）と、救出する側の親友でCEが演じる白バイ女性警察官の視点の両方で物語が展開する。主演は芸能事務所〇×エージェンシーの誇る人気歌手のIMと同事務所のアクション女優CEの共演、他に豪華俳優陣で撮影が進んでいた。

なので、IMとCEの撮影は現在別々の場所で行われている。主にIMはロケで使われているフェリー船内やコンサート会場や控室とかの室内、CEはバイクアクションとかあるので野外での撮影が多く、この様にコンテナ埠頭とかY国際港の商店街や港町水上警察署を背景の撮影が多い。

●人員増員

碇屋はHGとSK以外の男手…特にエージェント部門の若い男手が居ないので、HGは常々男性エージェントをどうするか考えていた。

また白山亭も夜のPub営業はHGがやっているの、以前HGがエージェント任務でPubを度々臨時休業にしていたせいで、常連客…特にIFからは過去に『折角、帝都から電車に乗ってわざわざ来てやっているのに、事前連絡もなく“臨時休業”とは、何様のつもり！』と度々怒りのメールが送られてきていた事もあり、（『巻き込まれ親父の困惑』参照）

誰かい人はいないかと探していた。

IIは、HGの軍時代の部下で機甲師団の特殊車両試験部隊でSKと共にテストチームを組んでいた。SKが足の負傷で傷痍軍人として除隊後も暫くはHGの下に居た。

背の小ささ（IY位）、顔立ち、名前が女性みたいなので周囲からから「Iちゃん」と女の子呼ばわりされていた。HGの部下になったとき「II」…大昔の剣豪にそういう名前が居たねえ…いい名前じゃないか」と、親がつけた名の意味を教えずに即答で褒めてくれ、SK共々IIを普通に扱っていたので、HGに従っていた。たまに冗談で「Iちゃん」呼ばわりしていた…

軍縮によりHGはリストラされるが、IIは暫く正規軍に残ることができた。IIは除隊後、K市の繁華街でBarの雇われマスターをしていたが、都市再開発計画の地上げにより、勤めていた店が閉店する事になり、次の転職先を考えていたところ、たまたまY市の商工会議所が主催するエージェント会社の交流会の集まりの後にHGとSKがIIのBarに立ち寄り、再会を果たし、HGにスカウトされ、そのまま白山亭の夜のPub営業を任された。HG同様「特別銃器携帯・使用許可証」とその上位許可証の限定解除をもつ数少ない人材。なので、碓屋のガンスミス部門とエージェント部門の手伝いもする事になった。

●AM

白山亭の入り口のドアが開き、一人の男が入って来た。

「いらっしやいませ」

IAが応対する。男は店内を見回しているの、

「こちらにどうぞ」

と言って、窓際のカウンター席に案内する。

「メニューです。お決まりでしたら、お呼びください」

と言って、I Aは席を離れる。暫くして、男の手が上がり、I Aが男の元に行く。

「すみません、この白山亭オリジナルコーヒーと、あと白山亭サンドウィッチを…」

「はい、白山亭オリジナルコーヒーと白山亭サンドウィッチですね」

「はい、それを」

「畏まりました」

I Aがバーカウンターに行き、「オリジナルコーヒーとオリジナルサンドウィッチを…」とTTに言う。

男は、再び店内を珍し気に眺めて、レジ後ろのパネルと前の看板「ミルクホール白山亭」が目に残り、席を離れて見に行く。こういう行動をする人は、始めて来店した人に多い。

I Aは気を聞かせて、「よろしければ、これをどうぞ」と言って、レジ裏のパネルをまとめたパフレットを渡す。

「ありがとうございます」

男は、I Aから貰ったパフレットを席に戻って眺めていた。やがて男が注文した品が出来上がり、I Aが「お待たせしました。白山亭オリジナルコーヒーと白山亭サンドウィッチです。ごゆっくり…」

と言って男の席に注文の品を置くと、一礼して席を離れた。

その時、

「きゃー、またあんだかー！」

と言う女性の叫び声が聞こえ、男は飲みかけのコーヒーカップを置いて振り向く。

その場に女給姿の港町警察署の女性警官のアルバイトが、一人の男の腕を背後に回して取り押さえている光景が目に入った。

「急いで、社長呼んできて！」

と男を取り押さえた女給の言葉にバーカウンターに居るTTが頷き、内線電話をかける。

「今日と言う今日は許さないわよ！いくら社長の知り合いだからと言って、ここは社長がジェントリの空間と決めてんだから、そこで人の尻触っていいと思うな――！」

男は（確かに言う通りだ…それにしても、ここの従業員は心得があるな…）と感心して事の成り行きを見守っていた。

やがてバーカウンター横の入り口から、一人の男が入って来た…HGである。

HGはそのまま店内で女給が男…痴漢を取り押さえている所に行き、痴漢に対して「…また、お前か…」と言った。痴漢の男はこの商店街にある葛葉組の構成員…普段は派手なシャツとジャンパーを着て街を闊歩しているが、流石に白山亭に入る場合は、白シャツにスーツ姿…いや、そうしないとHGと親分のDA組長からこっぴどく叱られる。なら、わざわざ白山亭に入店する事はないのだが、この男、制服フェチであり、特に白山亭の女給服が好きでわざわざ店内に入ってきて、つい出来心で女給の尻を触る悪い癖がある(笑)…

「この前、言ったよな『次やったら、警察に突き出す！』と」

「く…」

と言って、痴漢は項垂れた。HGが「君、そのまま職場（女給の女性警察官の勤務している港町警察署）に連行していいよ！」と言ったので、痴漢が慌てて女給を振りほどき、逃げ出した。慌てたTTがバーカウンター裏の引き出しを引いて、中の拳銃に手を掛ける。

…TTの拳銃には、食い逃げや痴漢等の対応用にペイント弾が装填されています。作者その途中に先程の窓際のカウンター席に座っている男の側を通ったので、その男は逃げてきた痴漢を捕まえた。

追ってきたHGに

「ご協力感謝します」

と言って、痴漢を引き渡して貰うとも男が

「あれ？もしかしてH G教官ですか？」

と男は言った。H Gは男の顔を見て「…誰だっけ？」と言ったので、男がこけた。

男は立ち上がり、

「俺ですよ、俺…民兵会社D Kに居た頃、体術訓練で教官に何度も締め落とされた…」

「…ああ…てっ、誰？」

と言うと、また男がコケル。

「民兵会社D Kであなたに教えを受けた、A Mですってば！」

と男…A Mが言う

「民兵会社D Kの社員に教え子は沢山いるが、男は知らん！」

と言って、H Gは腕組みしてふんぞり返る。H Gが腕組みしたので、男はそろりとH Gから離れ、一目散に店外に逃げ出した。

「准尉…痴漢が逃げました…」とT Tが言うと、H Gは「えっ？」っと、言っ

て横にいるはずの痴漢男を見ると確かにいない…

…漫画なら、痴漢の居た位置に点線で人物のマークがあり、その中に“こっぜん”とでも書いてるような感じ。作者

「あー、お前のせいで逃げられたじゃないかー」

「それ…俺のせいですか、そもそも腕組みしてふんぞり返ったあんたのせいだろう！」

とA Mが言うと、H GはA Mの肩をポンと叩き、

「お前、漫才の腕が上達したなA M…」

と言った。A Mは

「あのう…H G教官…俺と知っててわざと？」

「うん」

と言って、H Gが頷く。（この“オヤジ”…相変わらず人をくった事を…）と思ったA Mは

歯噛みした。

…AMの新入社員時代はHGを陰で「オヤジ」と呼んでいました。作者

「まあ、こつちに来い」

と言つて、AMをバーカウンター席に連れて行くと、

「ここ…HG教官の店なんですね」

「そう…ばあさんの店を継いだ」

「准尉、この方を知っているのですか？」

とTTが訊ねると、

「そうか、お前さんが結婚退職した後か…こいつはAMと言つて、俺の漫才相手だ」

とHGがシレつと言うと、AMがコケル。AMがHGの事を「教官」と呼んでいる時点でHGの民兵会社時代の教え子である事はTTでも分かる。

「…そういえば、教官」

「なんだ？」

「さっきの痴漢どうします？」

「…ん？あれ…あれの居場所は知ってるからいいの…ほっとけばまた来ると思うよ」

「なんで？」

「あれは、俺の身内（葛葉組のDA組長はHGの親戚）の手下だから、後で親分（組長）に連絡して叱ってもらうからね。それを知ってるから、彼女も後を追わない」

と言つて、HGは店内で普通に仕事している痴漢を取り押さえた女給を指した。

「…と言う事は、さっきはわざと逃がしましたね？」

「わかつちやったか…」

と言つて、HGが笑う。

「相変わらず、教官は人をくつてますね！」

「俺は食人族ではないぞ…でも、若い女の子は美味しそうだな…」

とHGがシレつと言うと、（このオッサン！）とTTは苦笑いして突っ込む。

「そっじゃなくて！」

AMが言うと

「…な、いい漫才相手だろ？…こいつイジリ甲斐があるんだ。そこだけは変わらんな」

とHGはTTにAMを親指で指して言った。それを聞いたTTは、また苦笑いをした。

「ところで、お前さん今何をしている」

「ここでコーヒーを飲んでいます」

とAMはシレつと言ってHGに返す。

「そーか、美味しいか？」

「はい…じゃなくて、今俺が何の仕事をしているのか興味ないんですか！」

「うん、ある」

と言って、HGは思い出したように、

「そういえば、AMお前、会社退職後に海外逃亡したと、お前さんの同期に聞いたことあるが…なんでも、女の子孕ませたとか、借金が嵩んだとか、ヤバイモノに手を出したとか…（後

半HGの嘘です（笑）」

とHGが言うと、AMは席から転げ落ちる。

「イテテ…」

「こけ方が悪いと怪我するぞ！」

「気を付けます…じゃなくて、なんでそんな話に…い？」

「違うのか？」

「違います！」

「真相を報告しろ！嘘偽りは申すな！！」

H Gが軍時代の独特の口調で言うと、

「ハッ！」

と言って、反射的に直立不動の姿勢になり、A Mは話し出した。

「自分は、退職後に色々な仕事を転々となりました。その間にコツコツとお金を貯めてA国に行き、そこで探偵のアシスタントをしたり、独立してボディーガードをしたりしていました」

「そうか…って、嘘だろう？」

H Gが訝しがって訊ねると

「ホ・ン・ト・ウです！で、向こうの物価の高騰で仕事にあぶれたのと、母が亡くなったと知らせがあったので、皇国に帰ってきました」

「それは、大変だったな…特にお母さんについては…」

「はい」

「で、今は？」

「今は新たな仕事を探している最中です」

「ふーん…そこは、『ここをコーヒーを飲んでいます』だろ？」

「あのですねー！」

真剣な話をしているのをH Gに茶化されたので、A Mは怒った。

「准尉…チョット…」

T TがH Gの袖を引く

「なんだ？」とH Gが言うと、T TはH Gの耳元に囁く

「(…あの、差し出がましいですが、あのA国でボディーガードしていたんですね…)」

「(…そのようだな)」

「(准尉、日頃から『男の子が欲しい(すみません、碇屋の男性エージェントの事です(笑))」

“と言っているのです、この際…”

「(お前もそう思うか?)」

「(はい)」

とHGとTTがヒソヒソと話しているので、AMは不審に思っ

「教官…なにをコソコソと…『男の子が欲しい』とか聞こえましたが?」

とAMが訝し気に尋ねると、

「いや…なに、今晚ナニするかと…」

「あら…ヤダ…」

と言っ

「HY入ります」

と言っ

「あれ?もしかしてHY先輩?」

と言っ

「え〜と、誰だっけ…」

と言っ

「ほら…みろ」

HGが言っ

「俺です。俺…民兵会社DKに居たAMですよ!」

「AM…AM…そんな人居たっけ?」

とHYが額に手を当て考え、次に天井を見上げてから言っ

「エーツ、本当に忘れてます？」

とアピールするA MにH Yは素直に、

「はい」

と答えるが、H Yも少しA Mの事を思い出したようで、

「じゃあ…T Y知ってる？」

「はい、俺の2年先輩です」

「ふうん、あの頃の子…じゃI F隊長は？」

「もちろん知ってます。教官と一緒に飲み連れて行って貰った覚えがあります」

「教官って？」

「H G教官の事です！」

A Mの言葉にH Yは（准尉の事、教官と呼んでんだ…）と思って、

「それで、大体絞れたけど…でも誰？」

とH Yが言うと、H Gが「お前、存在感無いなあー、そんなんじゃグランプリ狙えないぞ！」

と言うと、「何のグランプリですかー！」「漫才の…」「そんなの、目指しません！」と言い

返している間に、H YがA Mを指さして

「あゝ、思い出した！」

「思い出しましたか？」

H Yの言葉にA Mは明るい顔でH Yを見ると、

「よく准尉にイジラれていた子！で、女の子孕ませて海外逃亡した…」

と言って、H Yは笑いながらA Mを指さした。

「そんな〜（泣）」

と言って、泣き顔になったA Mは、ふと思い直して、

「でも、なんでH Y先輩がここに居るのですか？」

「あつ、わたし？わたしは准尉に弟子入りして、ここに住み込みで働いてるの」

「准尉って？」

「この人」

と言ってH YはH Gの腕を取る。

「〃弟子入り〃 って…？もしかして、〃嫁入り〃 の間違いじゃないんですか？」

「あら…漫才の腕上げたわね」

と言って、H Yは頬を赤らめた。

H GとH YがA Mをイジリ出したので「やれやれ…この師妹は…」と思ったT T

「横から、ゴメンナサイね。私はT T…この店の従業員なだけど…」

と言ったところで

「えっ、教官の奥さんじゃないの？」

とA Mが驚いた。それを聞いてT Tは「あら…」と喜び、H Yは膨れる。それを見たH G

「そろそろ、『あんたとはやってられんわ、いい加減にせい！』と突っ込みが入りそうだから、真面目に言おう」

とH Gが言うと、一同（突っ込み指南はいらん！）とH Gに逆に突っ込む。

「俺達は、この店の他にエージェント派遣会社をやってるんだ。〃碇屋〃 いう会社名だ」

「えっ？」

A Mが驚くと、

「今、お前の話で、A 国でボディガードをやっていたと言うのを聞いて、碇屋にスカウトしたいと思うのだが、どうかね？」

「…それって、真面目な話ですか？」

「そう、大真面目だ」

と言って、H Gは胸を張った。それを見たA Mは（そうゆうところ、今一つ信用できないんだけど…）と思いつつ、

「さっきも言いました通り、現在職探し中です。俺のボディーガードの経験を買ってスカウトしてくれるのであれば、是非に」

「分かった。でも一応入社試験をしよう…今からいいかね？」

「はい」

「おい、M P！」

「ハイネ」

「ちよつとおいで」

M Pがバーカウンターの前に来る。

「彼を碓屋のエージェントに雇いたいんだが、これから港町警察署の道場で入社テストするから、ちよつと相手を頼めるか？」

「ハイネ…H Gこいつと殺る（体術・組手等の格闘術の相手の事）の力？」

と言って、M PはA Mを指さす。

「そうだ」

とH Gが言うと、A MはM Pをまじまじと見て、

「教官…ここの店って赤鬼が居るんですね」

と、本気だかボケだか分からない事を言ったので、

「ダレガ、赤鬼やネン！（他の人にもよく言われています）」

とM Pが怒って突っ込みを入れたので、H Gは（M Pも鍛えようによつては漫才の相手になりそうだ）と思った。

その後、A Mの格闘技と射撃のテストをして弟子入りを決定。エージェント部門の実行部

隊の男性1号となる。A Mは男性なので、母屋に住まわせるわけにも行かず、男屋でS Kの隣の部屋に住まわせる事にした。

●A M入門

晴れて、H Gの5番目？の弟子（1番I Y、2番H Y、3番T Y、3．5？番I A、4？番M P、5？番A M）となったA M。

A Mは、A国発行の「国際特別銃器携帯・使用許可証」を所持していて、A Mが所持している拳銃はA国では古くからなじみの深い拳銃：しかし、弾丸の口径がH Gを初め他の娘どもの拳銃より大きい（45口径。H G達は38口径を使用）ので、H G達の使用している拳銃と共通の口径のA国製の物をH Gが渡した。

：ちなみに、各自の拳銃は、H G…S国、H Y…D国、T Y…A国、I Y…D国、I A…S国、M P…D国、A M…A国、T T…D国、S K…O国、I I…I国の製品。拳銃弾は38口径の同一弾丸で統一。

その晩、S KとI IそれにT Tも交えて母屋の食堂で入門祝い（笑）が開かれた。とは、言えH Gの弟子のT YとI Yは任務先なので出席できず、リモートでの参加になった。

「皆様、既に自分の事を知っている方もいらつしやいますが、改めましてこの度ご縁があり、H G教官…もとい！准尉の弟子に入門しましたA Mです。准尉とは民兵会社D Kで入社した時にお世話になりました。その後、職を転々としてA国に渡って探偵の助手とかボディガード等をしていました。向こうの物価高騰と身内の不幸により、皇国に帰ってきました。皆様、どうぞよろしく願います」

と言って、A Mは深々と頭を下げる。

「と、言う訳だ…これで碇屋に若い男の芸人が入ったので、コントのレパートリーが増える

ようになった！」

とH Gが言うと、全員椅子からコケル（お約束！）

「二違います！」

全員からの突っ込みを受け、H Gは

「ジョーダン…冗談！…これで晴れて碓屋に男のエージェントが誕生した、みんなよろしくやってくれ！…なお、こいつはイジリ甲斐があるやつだから、そっちの方もよろしく！」

とH Gが言うと「イジリは要りません！」とA Mが叫んだ。

「まあ、そういう事だから、まずは乾杯！」

「二カンパーイ」

「わたしはH Y、もう知ってるから、これ以上はいいわね」

「はい、H Y先輩。よろしくお願いいたします」

『ヤッホー、A M。生きてたんだ。わたしはあんたの同期からヤバいことやってA 国に逃亡したと聞いていたけど』

「T Y先輩…そんなあ…（泣）」

「ほれ、俺が言ってた通りだろ？」

「教官く（泣）」

「姐さんが知っていると云う事は…」

とI Aが訊ねると

『わたしの2年下の後輩…っていつても、こいつ会社は3年程で辞めたけどね』

「私とI Yの先輩になるんだ」

『私達の年下の後輩は居ないのね…』

とI Yが残念そうに言うと、T Yは

『そりゃ、そーでしょ、あなた達の次の年度の後輩達には准尉は教育・訓練していないし、定年退職したしね』

『そうでした：初めましてA M先輩、私はI Yと言います。よろしくお願いします』

「わたしは、I Aです。I Yと同期です。よろしくお願いします。A M先輩」

「ワタシM Pネ、ヨロシクA M」

「皆さんよろしく願いいたします」

「私は、T T。昔、民兵会社D Kに居たことあるのよ。よろしくね：私、鍵屋の従業員じゃないけど、准尉の弟子達のバックアップをしているの」

「はい、T T先輩」

「俺はS K。H Gと一緒に碇屋の共同経営者だ」

「はい、よろしく願いします」

「私は、I Iと言います。H G社長の軍時代の部下で、今は夜のP u b営業のマスターをしています。私はお店があるので、ここで失礼」

「はい、よろしく願いします」

「T T：おめえは、こいつの事知らないのか？」

とS Kが言うと、T Tは

「はい、彼が入社した時には私は結婚して退職しましたので」

「…そうか」

『なに？新しい人？』

I MがI Yのスマートフォンに、C EがT Yのスマートフォンのリモート会議に割り込

んできた。A Mを見て

『あら…いい男。今度護衛依頼は、この人に頼もうかなあ…』

とC Eが言うと、T Yが『エ』と言って残念そうな顔をする

『あたしは、I Yでいいわ』

今やI Yと親友と言える仲になったI Mは言う。

H Gはここで、I Yに『任務終わってるんだから、早く帰ってこい!』と言いそうになったが、C Eとかの手前、言うのを思い留まった。

食堂から男屋に戻るS KとA M。H GがA Mを呼び止める。

「A M、ちょっといいか？」

「はい、教官。なんですか」

「あのな…言い忘れてたけど、この館幽霊が出るからな」

と言って、A Mを怖がらせようとしたが、

「そうですか…」

H GはA Mの反応に（つまんねー奴だな）と思った。

「幽霊の類は怖くないか？」

「はい…教官に締められるよりは怖くないです…それよりも、教官の親父ギャグの方が薄ら寒いです」

とA Mが平然と言うと（こいつ…）と思って、苦笑いした。

S Kが笑いをこらえていた。

●K JとA M

「今日は、I Yさんに会えますように…」

と白山亭の入り口で簡単に居住まいを但し、勢いよく入り口のドアを開けると

「いらっしやいませ」

と男の声で言われたので、K Jは仰天した。K Jを迎えたのは白山亭ホールスタッフの制服を着用したA M

…この時点では白山亭には男性用のウェイトアの制服はありません。女給喫茶なので当たり前ですが。作者

「K J様ですね…いつもの席は空いていますのでどうぞ…」

と言って、A MはK Jがいつも座る入り口付近のカウンター席を示す。そこには“予約席”の札が置いてあった。いつもはなにも置いていないので、二度驚く。

「君は？」

「この度、H G社長に弟子入りましたA Mと申します。以後お見知りおきを…」

と言って、A MはK Jに一礼した。

「弟子って…それじゃあI YさんとかH Yさんとかと同列…」

「はい、そうなります」

「それじゃ…君もH G社長の地獄の入社テスト受けたの？」

K JはI Yに近づきたくて、以前無理言ってH Gの鍵屋入社テストを受けて散々な目に遭ったことを思い出した。

「はい」

「よく生きてたね…じゃなくて、よくH G社長が認めたね…誰と戦ったの？」

「はい、あそこに居るM Pさんと組手勝負してから、H G社長と戦いました」

「どうだった？」

「M Pさんとの勝負には勝ちましたが、H G社長にはまた締め技で落とされました…ハハ」と言っ、A Mは頭を掻いた。

「えっ？あの赤鬼と戦って勝ったの？…イテ！」

「ダレガ、赤鬼やネン！」

と言って、いつの間にかK Jの背後からM Pが頭を鷲掴みにする。

「イタタ…お客に何をするんだ！」

「I Yにつく悪い虫は、お客じゃないネ」

「そうですか…でも本当に痛いから離して」

「ところで、君」

「はい」

「I Yさんはどうしたの？」

とK Jに聞かれ、A Mは確認のためにバーカウンターに居るT Tを見ると、首を横に振っているの、

「任務中につき申し上げられません」

「また、入院しているの？」

「それも申し上げられません」

「なんだよ」

●M Z再び

「いらっしやいませ」

ピチツとしたスーツを着こなす金髪女性が白山亭に来店した。対応した女給が

「うわっ…外人…」

と驚く。急いで店内に居るはずのM Pを探す。奥のステージの付近のテーブルの片づけをしているM Pの姿を見つけ、

「M P！ちよつと…」

と呼びかけると

「ハイネ」

とニコやかに言ったMPが入り口に居る女性を見て、顔をしかめる：

「オマエ：MZ！」

「ハアイ！MP」

と陽気に手を上げるMZ

「何しにキタ」

「…あらあ：お客様に対してなんて態度を取るの？お店の教育がなっていないわねえ：いや、この場合躰かしらあゝ」

それを聞いて苦笑いするTT：

「まあ：こちらにどうぞ…」

MZがMPと何かトラブルを抱えているらしいのを察し、またMZが皇国語を話せると分かった女給がカウンター席に案内する。

「ありがとう」

と言って、カウンター席にMZが座ると、

「いらつしやいませ、MZ様、ご注文は何にしましょう」

と言って、TTがメニューを出す。奥ではMPがMZに対して舌を出して威嚇していた。

「白山亭ブレンドコーヒーとHG社長を…」

「畏まりました：白山亭ブレンドコーヒーと社長のHGですね」

と答えるが、(何時から、准尉はメニューに載ったのだろうか…)とTTは独りノリ突っ込みをした。

サイフォンでコーヒーを淹れている間、TTは内線電話でHGを呼び出す。

『ナニ？ M Zが俺を注文したあ？』

と電話口で T Tが「M Z様が来店され、准尉をご注文されました…」と冗談で伝えると、電話口で H Gが反応する。それを聞いていた M Zが苦笑する。

やがて身なりを正して、H Gが白山亭内に入る。

「いらっしやいませ、M Z様…私を御所望だそうで…」

「ハイ、確かに注文しました」

M Zのジョークに乗っかり対応した H Gの返事に、M Zも自分の言い出したジョークに再度乗っかる。

「何用で？」

「ハイ…今日は美味しいコーヒーを飲みに来たのと、こちらからのセールスに来ました」

「コーヒーは出しますが、セールスはお断りしています」

H Gは塩対応で返す。

「…そんなことおっしゃらないで…これが売れないと私、国で病気に伏せている両親に仕送りできなくなります…」

と言って、わざとスーツの袖を目に当て泣く真似をした。それを見て（このパッキンねーちゃん…けっこうやるじゃん！）と、M Zの芝居に感心した。

「こんなオンナの話聞く必要ないネ」

いつの間に M Zの後ろに来た M Pが言う。H Gは折角の新手の漫才相手が見つかったのに水を刺されて

「…M P」

「ハイネ」

H Gは無言で M Pを追い払う仕草をした。それを見た M Pは怒りで顔を真っ赤にして、無

言でテーブル席から片づけた食器を乗せたトレイ毎ガチャリと音を立ててバーカウンターに置くと、振り返ってドスドスと音を立てて店の奥に歩いて行った。

「H G 社長：店員の躰がなくなっていませんねえ…」

と M Z が怪しい目つきで言うと、H G が

「はい…おつしやる通り…申し訳ございません」

と口では言うが、H G 本人は平然としていた。

「…で、貴女の国の両親に免じて、話は伺いましょう」

と H G が M Z との漫才を再開させると、（まだやんの？）と M Z 本人と T T が驚く。H G のやる気に負けた M Z は、

「はい、今日お持ちしたのは、私の本国 D 国で作られた最新のインナーの紹介です」

と M Z は明るい口調でセールスを始めた。

「インナー…？」T T は（この女…セクシーランジェリーの訪問販売でもするの？）と思った。

「ナニナニ？下着？」

と言っている間に H G の後ろから H Y と I A が覗き込む。H G は「わっ！」と驚いて、「なんだ！お前ら？」と言うと、二人は「だって…准尉が注文されたと聞いたんで…心配になりました…」と言う。それを聞いた、M Z はニツコリと笑って、説明を続けた。

「このインナーは、ただのインナーではありません。防弾仕様になっております」

と、M Z がカバンからインナーを取り出すと、（あつ、そっち…エージェント部門に必要なね）と思って、T T は苦笑した。

「この防弾インナーは最新の素材でできていて、薄くて軽いどころか、防弾性も従来のモノより 3 倍の威力はあり、至近距離のマグナム弾や 200 メートル離れたところからのアサ

ルトライフル弾もストップさせます」

と、言っただけ持っているカバンからタブレット端末を取り出し、ビデオを見せる。そこにはインナーを着用したマネキンが色々な銃器で撃たれていた。それを見たT.Tは驚き（マネキンが可哀想…）と思った。（そっちかい！作者）

ビデオを見せてMZは、ドヤ顔で

「本来、我々（MZの所属するD国エージェント機関DSF）と提携していただければ、こういったモノや装備は無償で提供いたします」

と、高飛車に言う。HGは（まだウチとの提携にこだわりがあるんだ…（『巻き込まれ親父の困惑』参照）と思った。

「今日は、美味しいコーヒーに免じて、初回特典…このインナー上下セットにさらにもう1セットをつけて2セット×万皇円を今なら、△万980皇円！2セットでこの値段ですよ
うゝ」

MZはまるでテレビの深夜の通販番組調に言った。それを聞いたHG

「ふむ…」

「さらに、防弾ベスト1着も付けて、今なら◇△万980皇円！どうですか？お客さん！」
とMZが畳みかける。

「うゝん」

と言っただけ腕組みをした。HY達娘は無言で（パパ…これ欲しい！買ってー（笑））とHGに圧力をかける。

「そうだな…I.Yが撃たれたことを考えると、この娘達の命が大事だから…」
と言うと、HY達は手を取り合っただけ「やったー！」と喜ぶ。

「…しかし、ちょっと気になる事がある」

「何ですか？」

「このインナーを着用した場合、インナーの締め付けや素材による動きの制約が心配だ：我々の仕事ではD国の国情と違い、銃器の使用より、体力を使った格闘術や護身術を使う場面が多い、いくら防弾性に優れても、その分、機動力が落ちるのは避けたい。それと、刃物に対する防御について知りたい」

とHGが言う（…それは確かに！）とHY達は思った。

「そうですね…その懸念は理解いたします」

とMZが言うと、HGは

「できればサンプルが1セット分貰えれば、こちらでテストしてその結果如何で購入するかどうか決めたいが…」

「成程…そうですね。HG社長がおっしゃる事は分かります。サンプルを1セット差し上げましょう…きつと、気に入ってエージェントの皆さん買っていただけますよ」

「自信があるんだ」

「はい…あと、このインナーを既に着用している人がそちらにおりますが…」

「『誰?』」

「あそこの脳みそ筋肉女ですわあ」

と言って、MZは店内の奥でいじけているMPの方を振り向いた。「『えっ!』」と言って、バーカウンターに集まっている一同驚く、その光景を見てMZは不審に思い、

「MPチョット…」

MZがMPを手招きした。それに対して不服そうな顔で

「ナンダMZ」

と言って、店の奥からMPかずかずかとMZの所に来た。

MPを見るHY達…MZは

「貴女、最新式防弾インナーについて皆さんに言った事なかったの?」

と聞くと、M Pはハツとなり

「…ワスレテタ」

「M P！貴女ねー…だから、当局内で『脳みそ筋肉女』って、言われるのよ…全く同期として情けないっただけありやしない」

「ムキッ！」

と怒りに紅潮したM Pを見たH Gは（本当に赤鬼…）と思った。

後日、M ZがI Yに合うサイズのサンプル一式と、カタログを送ってきた。早速I Yが着用して、港町警察署の道場でM PやH Y相手に格闘技などの試合や港の倉庫でエアガンを使用した模擬戦をした。I Yの報告では「市販のインナーと同じフィット感でした…ただ、通気性が悪くて汗が吸収されにくいのと乾きにくいです」と言った。皇国より年平均気温が低く空気が乾燥しているD国と違い、温暖で湿度が高い皇国ならではの欠点が見つかった。最後にY市銃砲試験場のシューティングレンジで、的にして銃器で撃ってみたり、刃物を刺してみたりしたら、M Zのセールス通りの結果が証明され、通気性の問題を除けば有効であると判断された。

H GはM Zにインナーの通気性について、改良が出来ないかを条件に価格交渉して、H G、T Tが上下3セット分、H Y、T Y、I Y、I AとA Mが上下5セット分と同じ素材の防弾ベストを経費で購入し、後は、M Pを含めて各自色とかデザインの好みでの追加分は自腹購入する事で、M Zに発注した。

●H G入院す

「よるーのハイウェーに…早く帰らんと、H Yに叱られるうー」

と、歌いながらH Gは夜の帝都都市高速道路を愛車で走る。日中、O県領地知事O T殿下か

ら警護依頼が入った。いつもならTYを就けるのであるが、TYは芸能事務所〇×エージェンシー所属のアクション女優CEの警護任務で24時間CEのマンションに居るため、急遽AMに任せることにした。こういった時にAMのA国でボディガードをしていた経歴と経験が役に立つ。

帝都の皇王省（日本の宮内庁に相当）敷地内にある帝都外に居る皇王家の人が来た時に使用する邸宅（〇県領地知事OT殿下は皇王の弟にあたる）にAMを連れて行った。

OT殿下は、いつも警護を引き受けてくれているTYの代わりにAMをHGが連れてきたのを訝しがったが、TYが別案件で任務中であるのと、AMが海外でのボディガードをしていた経験をHGが話すと納得した。

その帰り道、帝都市高速道路で急に渋滞に巻き込まれる。

「あれ、渋滞かよ」

と言って、車を止める。次の瞬間：「ワッ！」

夜の母屋。HGの帰宅を待ちながら食堂で盤ゲームに興じるIAとHY：HMは食堂のテーブルに頬杖について、居間にあるテレビで報道番組を視ていた。

『番組の途中ですが、ここで事故のニュースです。帝都市高速道路4号線で、渋滞中の車にトラックが追突して、車が炎上している模様です。これは報道ヘリからの中継です。追突された車らしきモノが炎上していて現在消防による懸命な消火活動が行われています…なお、追突された車を運転していた男性は既に救助され、意識不明で病院へ搬送されたそうです。またトラックを運転していた男性も意識不明で病院へ搬送されたそうです。警察の話によりますと、トラック運転手の意識回復を待つて事情を聴取するとの事です』

テレビでは高速道路上で炎上している車が映し出されていた。

「最近…こういう事故多いわね」

H Yがテレビを横目で見て独り言の様に言う

「そうですね、トラック運転手の過剰労働による居眠りとか、ストレスによる飲酒とか…ありますものねえ…」

H Mが応じる。I Aが盤上の駒を進めて、

「これでチェック！」

「あつ、待った！」

「ダメですよ、これで2回目ですよH Y先輩」

「うーん、マイッタ！」

とH Yが言ったところで、母屋の固定電話が鳴る。H Mが食堂の子機を取り、

「はい、Hです…はい…」

と、応対するH Mを見てI AとH Yが

「准尉ではない様ですね」

「そうねえ…准尉はこの固定電話にかけてこないものね」

と言っていると、突然

「はい…はい…エーッ！」

とH Mが驚きの声を上げる。その声に驚くH Y達。電話を切り、その場に蹲るH M…H Yは驚いて、H Mの元に駆け寄り、

「どうしたの？H Mさん」

「叔父さん（H G）が事故で入院したって…どうしよう…」

手で顔を覆うH M。H YとI Aは「えー」と驚いた。

「…取り敢えず、主な人に連絡しましょう…」

ここで気丈に振る舞ったのはH Yである。

「H Mさんは、准尉のご家族に連絡して！」

「…はい」

と言って、H Mはテーブルに置いてあるスマートフォンを手を取った。H YはI Aに振り返って、

「I Aは、軍曹呼んできて」

「はい」

「私は…」

と言って、H Yはスマートフォンを手にとると、社員連絡用のメッセージアプリを使って、一斉送信しようとしたが…ふと思いとどまった。(I YとT YとM PとA Mは任務中だし…) と思ってH Yは母屋の食堂にあるホワイトボードを見ながら言った。そこには、各自スケジュールが簡単に書かれていた。

「I YはI Mさんとまだ一緒に居るのね。T YはC Eさんの警護でC Eさん宅に泊まり込み…M PはD 国大使館で防弾インナーについてD 国の製造元とテレビ会議中だし…A Mは准尉がO 県領地知事の警護任務に連れてったし…、まだ分からないのにあまり大袈裟にしないなあ…」

と、H Yが考えている時に、

「ナニ！H Gの奴が事故って入院しただと！」

玄関からS Kの怒鳴り声が聞こえた。片足が不自由なS Kは杖を突きながら這這の体で母屋奥にある食堂に入ると、

「奴(H G)の容態は？」

と訊ねるS KにH Mは狼狽えながら、

「警察からの電話では意識不明としか…どうしよう…」

看護師で近所の総合病院で働いていて、日常緊急搬送される事故による重傷患者を見慣

れているはずなのに、いざ身近な肉親の事となるとこうも気が弱くなると言う事を、H Mを見てH Yは思った。

「まずは、奴が搬送された病院に行こう！I A、車の用意だ」

「はい」

「H Y！」

「はい」

「連絡は？どこにした？」

「はい、准尉のご家族にはH Mさんをお願いしました。会社の人達には社員用メッセージアプリで一斉通知しようとしたんですが、T Yとか任務に就いている人が居るので…それにまだ詳しいことが分からないうちに大袈裟にしたいくないと思い、どうしようかと…」
と言うと、S Kは安堵して

「H Y、それはいい判断だ…任務中の連中にはまだ知らせるな。取り敢えず連絡先は主要な者だけでいい…K M、T T、I I（この人達は、外部からの通勤）だけにしろ」

「はい」

H YはS Kの言った人達に対してショートメッセージの第一報を送信した。

I Aが運転するワゴンに乗ってS K達はH Gの搬送された病院に向かった。

H Gが搬送された病院行くと、待合室に警察官が居た。H Mが警察官の元に行き、

「あの、私連絡があったH Gの身内の者とその関係者ですが…」

「はい、H Gさんのお身内と関係者の方々ですね…お身内の方と入院している被害者ご本人の続柄を教えてくださいますか？」

「叔父です。私はH Gの兄の娘です」

「分かりました…まずは落ち着いて座ってください」

と言って、警察官はS K達を待合室の席に座る様指示をした。

「あの、叔父の容態は？」

「現在検査を終え、ICUに居ますが、意識不明だそうです」

「叔父に会わせていただけますか？」

「…それは、今現在では難しいと思います。ちなみに身内は姪子さんお一人ですか？」

「私は叔父と同居しています…じきに叔父の両親と私の両親がこちらに来る予定です」

「分かりました。ありがとうございます」

K M、T T、I Iが続々と病院に駆けつける。みな駆けつける度にH Gの容態をまず聞かれ、その度にH Mが説明していた。

そして、H Gの両親がH Gの兄夫婦と共に病院に来た。それまで泣かなかったH Mが母とみられる人に抱きついた。

「H M…この人達は？」

H Gの母親であろう老女が訊ねる。H Mがこの状態では説明が出来ないと思ったK Mが「おばちゃん、この人達はね。H Gの会社の人達よ」

K MはH Gの従姉（H Gの母の兄の娘）であるので、H Gの両親と兄夫婦と面識がある。

それを聞いて

「こんな夜遅く、わざわざ…H Gの母です。息子がお世話になっています」

「H Gの父です。息子の為に来ていただきありがとうございます」

「H Gの兄です」

「H Gの義姉です。義弟と娘がお世話になっております」

と言って、頭を下げた。

警察官は病院に来た人達の挨拶が済んだと思ったところで、「帝都警察庁交通機動科の者です」と言つて、H Gの容態と事故の状況について話をした。

「…と言う事でして、現在追突した方のトラック運転手も意識不明で、意識が戻り次第事情聴取の予定です」

と警察官が言つたところで、I C Uから医師が出てきて、警察官が「被害者の主治医です」と紹介した。主治医の話では命は取り留めたものの意識不明との事。

これ以上はどうしようもなく、H Gの両親が

「本日の所はお引き取り下さい」

と言つたので、K MとH MにH Gを任せてS K達は一旦引き上げることにした。

●社長代理

H Gが入院する病院から引き揚げてきた、T T達後から駆けつけ組を含むS K一行。母屋の食堂でS Kが開口一番

「H Gが入院して意識が戻らない以上、どうにもならん…できることは祈るしかない…俺は日頃から奴とこういう事が起こる事を想定して話し合いをしていた。俺は奴程頭が良くないから、経営云々はよくわからんが、社長代理として現状維持ならできる…ここに居るのは、幸いK Mを除き白山亭と碓屋の主要メンバーが居るので、H Gの意思を伝える」

と言つて、S Kはそこに居る一同を見回し、

「まず、白山亭は今まで通り昼間T T、夜はI Iで通常営業する」

「は、い」

「碇屋は、引き続き俺が運営する。但し、碇屋のエージェント部門は…」

と言って、S Kはそこに居る面々を見回して、その内の1人を指差し、

「H Y…お前が指揮をとれ！」

「！」

H YはS Kの言葉にビクツとして硬直した。

「奴は言ってたぞ、『俺が万が一の場合はH Yに指揮を任せる』と…もちろん、H Yお前一人じゃない、他の娘共と連携し、それを取りまとめろ…と、それからT Y、I Y、M PとA Mは現場実行部隊…お前はそいつらのサポートに徹しろ…とも」

H Yはたじろいだ。

「大丈夫よ、H Y…私もできる限りサポートするわ」

H Yの隣に居るT Tが優しく言った。

「ありがとうT T」

「要は、奴の容態がはつきりするまでだ…それで駄目なら、碇屋のエージェント部門は閉める。それが奴の意思だ！」

「…て、言う事は…万が一の場合は、私達…」

I Aが不安そうに言うと、

「白山亭の店員で食べていく事だな…もつとも、次のオーナーが誰になるのか知らんが」

とS Kが言うと。

「そんな…冷たいですよ…軍曹」

と泣きそうな声でI Aが言うと、

「そーですよ」

T TがI Aに同情する。

「碇屋の共同経営者として俺と奴とで決めた事だ…ここに居ない連中には明日、俺から説

明する。その後のパート・アルバイトには、T T：お前さんから説明をしてくれ。あとは奴の回復を祈るより他はない」

「はい」

翌朝、出勤してきたパート・アルバイト達に対して、白山亭内でS Kが話をした。その話に一同声を失う。

H Yが「社長が戻る場所を守りましょう！」と言うと、パート・アルバイト達は皆賛同した。それを聞いてS Kは、(H G：おめえって奴は…大したもんだ！)と感心した。

午前中、病院に居るK MからH Yに連絡が来た。それによると、H Gは頸椎骨折、胸部圧迫骨折と大腿部骨折：頸椎骨折は追突の衝撃によるもの、胸部と大腿部は追突の衝撃で車が前後につぶされ押し出された座席とハンドルに挟まれたモノによるらしい：頸椎骨折の衝撃で軽い脳挫傷状態になり意識不明になったとの事。あと、乗っていた車が炎上する前に助け出されたが、若干足に火傷を負った。

H Gの両親がI C Uに入りH Gの状態を見たそうである。

●事件発生！

Y 国際港コンテナ埠頭：

I MとC Eが主演するドラマの撮影が続いていた。

C Eは、ドラマのスタントシーンの一つの練習のため、スタントチームと練習していた。今撮影しているシーンは、C Eが演じる女性白バイ警察官が犯人の乗ったトレーラーを追跡して、トレーラーが行く手を塞ぐパトカーの列を避けようとして急ハンドルを切って横転するトレーラーの下空間を自ら白バイごと倒してすり抜けるという場面：

C Eが所属している芸能事務所〇×エージェンシー社長のMKは、最近C Eのミスが多発していてスタントシーンの撮影が押しており、これ以上撮影スケジュールを後ろ倒しにするのは、予算的に無理と考え、このシーン以降はスタントマンを使用した撮影に切り替える様に監督に指示を出した。

スタントマンから今やアクション女優に出世したC Eは（折角掴んだ女優の座を手放してなるのですか！）と、監督に対して「このシーンは絶対わたしがやります！」と訴え、スタントチームが止めるのにも関わらず、スタントの練習を続けていた。監督は仕方なく、C Eのやりたいようにさせていたが、スタントチームは「スケジュールが遅れて予算が超過すれば、それだけ実入りが悪くなるから、ここは別のスタントマンで続けるべきだ」と監督に訴えていた。

C Eはそんな状況にした自身を顧みずに、スタントの練習を続けていた。

「それじゃ、カメラテスト行きます。＂シーン503＂は、犯人の乗ったトレーラーを追跡する白バイに乗った主人公。犯人の乗ったトレーラーは行く手に塞がるパトカーを避けるため、急ハンドルを切るまでです。その先は別ドリになりますので、白バイもトレーラーの運転手役の人も、そこで止まってください。トレーラーを倒すシーンはまだ先だから、くれぐれも、トレーラーは倒さない様に！」

撮影シーンをボードを使って説明する助監督。助監督の説明に複数の撮影スタッフと白バイに乗るC Eとトレーラーを運転する犯人役のスタントマンが頷く。それからいくつか説明を求めると、

「では、お願いします。配置について下さい」

「[[[はこ]]」

撮影スタッフとトレーラーを運転するスタントマンとCEは、それぞれの配置についた。

『撮影班A用意はいいです』

『撮影班B用意はいいです』

『撮影班C、OKです』

『マルチカメラ撮影班用意はいいです』

『こちら、トレーラー、準備できました』

『こちらCE…いいですよ』

『こちらドローン撮影班、ドローン飛ばします』

と助監督の持つトランシーバーに次々と連絡が入る。

「監督、準備OKです」

「それじゃ、シーン503…よい」

監督が言うと、スタッフがカチンコと呼ばれる撮影器具を監督が座る椅子の前で撮影しているメインカメラの前にかざす。

「皆さん、スタートしてください」

助監督がトランシーバーに言うと、トレーラーとそれを追うように配置されたCEが乗った白バイが走り始める。トレーラーと白バイの速度が予定の速度になり、撮影シーンの絵コンテの場所に差し掛かると、監督が

「アクション！」

と言って、スタッフが持つ撮影に使用するカチンコが鳴り、監督前のメインカメラの前から引かれる。

撮影は、絵コンテを見ているタイムキーパーの指示で進む。タイムキーパーが「ハイ！」

と言うと、助監督が「トレーラー、ハンドル切って」と指示を出す。

トレーラーは予定通り曲がり始める。シーンは、トレーラーが後ろを走る白バイに対して、45度向くまで…そこから先は、別に撮影するので、トレーラーはそこで停車し、白バイも停車する事になっていた。

メインカメラのモニター越しに覗いている監督。上空ではトレーラーの向きを見ながら、ドローン撮影チームが

「はい、45度！」

と言うと

「カット！！」

と監督が叫んだ。

…次の瞬間、大きな音がした。

撮影をしているカメラには、停車したトレーラーに向かって路面を流れる様に滑っていく転倒した白バイとCEの姿が写っていた。

白バイは、そのままトレーラーに追突して止まった。一方CEは、その手前で止まり、動かなくなった。

「救護班！」

助監督が叫ぶと、撮影スタッフの後ろに停車しているトレーラーハウスから担架や医療品を持ったスタッフ達がCEの元に駆け寄る。その中には警護のTYが居た。

CEは本来なら、大怪我か死亡事故になるところであつたが、スタントマンだったCEの咄嗟の機転で、軽症で済んでいた。救急車が来るまで、担架でトレーラーハウスに一旦運ばれて行くCEを見送ったTYは、転倒した白バイに駆け寄った。

「アッ！、△□×万皇円かけて改造したバイクが」

と、撮影を見ていたMK社長が頭を抱えた。事務所の女優より、壊れたバイクの方に意識が行っていた。

TYが、CEが使用している白バイに似せたバイクを調べると油圧ブレーキのパイプにわずかに油が染み出している個所があり、よく見ると傷が見つかった。傷の位置からTYは、「…これって…石とかが跳ねて出来た傷じゃないわね…巧妙に剃刀の様な鋭利な刃物でパイプに沿って、いくつも傷つけられてる…ここからブレーキオイルが徐々に染み出しているって、本番中にブレーキが効かなくなったんだ!」

TYは自らオートバイを運転しているので、油圧ブレーキのパイプの損傷を見てそう直感した。その時、コンテナ埠頭に救急車が到着した。TYは警護するCEの命が狙われている事に気づく…でも、その確信が無いため、これ以上考えがまとまらず、どうする事も出来なかった。

「TYさん、救急車に同乗して!」

とCEのマネージャーの呼ぶ声がして、「はい、今行きます」と返事をして、TYはその場を離れざるを得なかった。

●HYの「めんどくせー」

母屋に居るHYのスマートフォンが着信音を鳴らす。

「はい」

『TYです。今いいですか?』

「はい、お疲れ様。いいわよ」

『実は、CEさんが撮影現場で事故を起こしまして…』

「えっ?…それでCEさんの容態は?」

『脳震盪を起こしていますが、軽症で済みました…今、救急車で港町総合病院に搬送中で私

も救急車に乗っています。本来なら重傷で入院するか、下手すると死亡していたかも知れないほどの事故でした…が、彼女のスタントマンの経験で無意識に安全策を取ったようです」

『立て続けって他にもあったのですか？』

「えっ！いつ、いや別に…で、撮影は？」

『とーぜん、ストップしています。あつ、それですね、この事故について不審な点がありまして…』

「不審な点…って、何？」

『彼女が乗ったバイクに細工がしてあるのが確認できました…これは事故ではなく、事件なのではないかと…』

「ちよつと、そっち行くわね」

『はい』

HYはTYとの通話を切ると、大きなため息とともに、

「めんどくせー」

と絶叫して机に伏せた。これはHGの口癖“めんどくせー”とは違い、HYの頭の中には、HGが意識不明で入院している最中に事件が発生し、事態收拾の方法が見つからなくてつい口に出た言葉である。机に伏したまま、HYは

「准尉…いや、親父ならどう考える…わたしが考えないと…まずは冷静にならないと…」

事態を正確に把握して判断しようとする姿勢が、民兵会社時代、初陣の戦場でパニックになった（「巻き込まれ親父の逆襲」参照）頃と比べて成長していた。

「そうだ！仮説に基づく情報収集と検収だ！親父は必ずやっていた…でも、わたし一人では…」

と言って、HYはガバツと机から起き上がった。

人手…と言うより、H Gの代わりに指揮を執るには、H Y一人では所詮無理と考え、H Gと一緒にいくつもの任務を共にしてきた仲間の知恵が必要…

H YはI Mの警護任務がとうに終わっているはずのI Yを呼び戻すことにした。

H YはスマートフォンでI Yにかける

『はい』

「もしもし、I Y？H Yだけど」

『何ですか？H Y先輩』

「あなた、I Mさんの警護任務終わってるわよね？今どこに居るの？」

『はい…今は、Y国際港に停泊しているフェリーの中でI Mの撮影に付き合っています』

I Yはバツの悪い返事をした。

「だったら、すぐ戻ってきて！緊急事態だから！！」

『はい？』

「電話では話せないのよ…兎に角戻ってきて…お願い！」

『はい分かりました！』

I Yが慌てて戻ってくると、H YはH Gが事故で入院した話をした。

「なんですと、なんで早く教えてくれなかったのですか！」

とI Yは怒りのあまりにH Yにつかみかかる。

「…わたしも言いたかったわよ！でも、任務中の貴女に言えなかったのよ！！」

とH Yが泣いて振り絞るように言うと、I Yはハッとして

「…すみません、私が悪かったです」

「いいのよ…I Y」

「…で、親父の容態は？」

「…まだ意識不明…今、K MさんとH Mさんが交代で病院に詰めているわ…」

「そうですか…」

と言って、I Yは肩を落とした。

「でね、あなたを呼び戻したのは、実はT Yの所で事件が起こって、わたし一人では対処出来ないので、手伝って欲しいの」

と言って、H YがI Yの肩に手を乗せると、I Yは気を引き締め、

「そうだったんですね。I Mから事務所を通じて、C Eさんが事故で入院して彼女の撮影がストップしたと聞きましたが…事故ではなく、事件なのですね。親父がいなければ、私達娘が結束して対処しないと駄目ですね…分かりました。何なりと…姉さん」

「…頼りにしてるわよ、I Y！」

「はい」

H YはT Yの所で発生した事件について説明した。

「わたし、これからC Eさんが入院している病院に行って、T Yと話してくるわ」
と言って、H YはT Yの居る総合病院に向かった。

港町総合病院…

C Eは意識を取り戻し、既に一般病棟に在るとの事。病室には、C EのマネージャーとC Eの所属する芸能事務所社長のM Kが居た。H Yの姿をみたM K社長は、

「H Yさん、わざわざどうも…H G社長は？」

と聞かれて、H Yはギクツとして

「あー、社長は、今帝都に…まずはこの度の事故に対するお見舞いを社長に成り代わり申し上げます」

と言って、誤魔化した。それを見たT Y…H Yの様子がおかしいのに気づいて

「H Y先輩…チョット」

と言って、病室の外に目配せした。H Yは頷くとT Yと共に病室を出て行った。

病棟の端にあるラウンジで

「H Y先輩…どうしましたか？」

と聞かれ、H Yはバツが悪そうに

「あなたのカンの鋭さには頭が下がるわ…実はね…」

H YはT YにH Gが事故で入院して意識不明の重体である旨を伝えた。それを聞いてT Yは、

「…まさか、准尉が？嘘でしょ？」

顔面蒼白になるT Y

「…ゴメンね。今まで黙ってて…任務中のあなたに言えなかったの…ごめんなさい」

「…分かりました。教えてくれてありがとうございます」

と言って、項垂れるT Y…H YはT Yの背に手を添え、

「でね、あなたの所のトラブルを私達娘が親父の代わりに解決しないと…それでI Yも呼び戻したし…」

と言うと、T Yが身を起こしてH Yに向き直り、

「分かりました、姉さん。親父が入院している今、姉さん一人では親父の頭の何十分の一しか知恵が回らないですしね。私ら妹の分の知恵も足さないとすね…もっとも、全部足しても親父の足元には到底及ばないですが…」

とT Yは持ち前の明るさで持ち直し、H Yに言った。

「あゝ、言ったわね！そうよ、その通りよ」

とH YはT Yの言葉に開き直って肯定した。

「それで、TY…その事故になったシーンって？」

「CEさんが演じる女性白バイ警察官が犯人の乗ったトレーラーを追跡して、トレーラーが正面を塞ぐパトカーの列を避けようとして急ハンドルを切って横転するトレーラーの下の空間を自ら白バイごと倒してすり抜けるシーンのカメラテスト中です。撮影していたのは、横転するトレーラーの下の空間を自ら白バイごと倒してすり抜ける直前のシーンです」

「そのシーンはスタントマン？それともCEさん？」

「CEさんです」

「…そう」

「CEさんの話では、『ブレーキが利かないので、自らバイクを倒して、自分はバイクから離れて体を確保した』と言っていました。そうですね、事故直後に転倒したバイクを見たら、油圧ブレーキのパイプが細工されていました」

「…細工？」

「なにか剃刀か、鋭利な刃物で細工されて、パイプからブレーキオイルが漏れる様になっていました」

「写真は撮ったの？」

「…いえ、CEさんが救急車で運ばれると言うので、そちらに気が取られて撮っていません…すみません」

「そう…任務はCEさんの警護だから、しかたがないわ…、わたしがコンテナ埠頭に行って、撮影に使われたバイクを見に来る…その細工されている場所教えて」

「はい…バイクのこのあたり…」

と言って、TYはスマートフォンで表示されたバイクの絵に細工箇所を示して、HYと画像共有した。

●情報収集

H Yは急いでコンテナ埠頭に行き、まだ警察による現場検証が始まる前に事故に遭った撮影用の白バイを現場スタッフに見せてもらった。碇屋エージェントは、I MとC Eの両方の警護を担っていたので、このドラマの撮影現場にはフリーパス状態で入る事が出来た。T Yが言っていた油圧ブレーキパイプの損傷個所の写真をスマートフォンで撮影した。それをT Yに送り確認を得ると、H Yは事故現場を後にした。

母屋…

母屋に戻り、タブレット端末に写真を転送して、H YはI YにT Yとの話を説明した。

「T Y先輩の話では、撮影に使用するバイクは本番用ですよね？」

「そう…撮影に利用するバイクは特注品だから、一台だけなんだって」

「意外とケチですね、本来予備に複数台用意するものだと思いますが…私はこういう機械の事はよくわからないから、I Aを呼びましょう」

と言って、I YはI Aを白山亭店内から呼んだ

「なに？I Y…今あたし店が忙しいんだから…」

「ゴメン…でも、今T Y先輩の所で事件が起こっているの…知ってる？」

「姐さんの所で？」

「うん、だから車両について詳しいあなたなら知っていると思って…」

I YがI AにT Yの調べた話を話す

「…うーん、私には…」

と言って、考え込むI A…しばらくして

「そうだ！軍曹に聞いたらどう？軍曹なら車両全般に強いから…」

とI Aが言うと、I Yも思い出して、

「あっ！忘れてた…」

と言った。そして、バツが悪そうにIAを見ると、HYが

「ありがとうIA、店に戻っていいわよ」

「すみません役に立てなくて、HY先輩」

と言って、店に戻るIAを見て、HYは

「IY、軍曹を呼んできて」

「はい」

IYに連れられて、SKが母屋に来た。

「なんだ、お呼びか？」

「すみません、軍曹…実は…」

IYがSKにまた説明する。

「…成程、HYの写真からすると…これは実に巧妙に細工されてるな…一見、ブレーキの油圧パイプが劣化して、縦にひび割れの亀裂が生じて破損した様に見えるが…ここ（タブレット端末の画面を拡大して）にあるいくつもの亀裂は明らかに自然にできたモノじゃねえ…多分剃刀みたいな薄くて鋭利な刃物で油圧パイプに沿って複数つけられた傷だ。この場合、2つの現象が考えられる。1つ目は、ブレーキを強く握る事により、油圧パイプが中のオイルの圧力に負けて破裂する場合…ま、人と言うと動脈硬化で急に血圧が上がると血管が破裂するパターンだ…でも、この写真では破裂した感じではない」

SKの説明を頭に入れようと必死になって聞いているHY達。

「もう一つは、ブレーキを効かせる度にここから徐々にブレーキオイルだけがパイプの外に染み出して抜けて行き、油圧パイプの中のオイルの圧力と外からパイプに掛かる空気圧の力が逆転すると傷から空気がブレーキパイプに入り込んでいきなりブレーキが効かなくなる…これも、人と言うと打ち身等で血管に亀裂が生じて血管から血液が血圧で徐々に染

み出している内出血の状態…この写真ではこっちに近いな。ま、もともと人の血管は体内にあるから血管から血液が漏れて周囲の細胞に影響を及ぼすけど…油圧パイプは外にあるから大気圧の影響でパイプ内の油圧と大気圧が逆転した時点でパイプ内に空気が入り込む。問題なのはすぐにブレーキの油圧パイプに空気が入らないところだ…普通は油圧パイプに傷や穴が開いて油が抜けて空気が混入すると、空気がクッションになって油圧自体がうまく伝わらなくなり、ブレーキの効きが悪くなる。そして、油圧パイプ内のオイルが抜け続け、中の空気の量が多くなると完全にブレーキが効かなくなる…今のバイクでは油圧系統のセンサーに探知されてブレーキの油圧警告灯なんか点灯して故障に気づくが、この程度の傷だと、漏れてもバイクの油圧系統のセンサーに探知されづらいか、もしくはセンサーが使えない様に工作されている可能性が考えられる」

「…どの位ブレーキを使ったら、効かなくなりますか？」

「うーん、この写真だけじゃ分からんな…せめてバイクの型式とブレーキ自体の使い方が分かればある程度予想ができるが…そもそも、この仕掛けをした犯人がブレーキパイプを一気に破裂させようとしたのか、そうではなく、ブレーキオイルを徐々に漏れるように巧妙に細工したかの意図が分からん」

「なぜですか？」

「こういうブレーキ装置には、安全のために油圧パイプに流れているオイルを余計に貯めとくための予備タンクがあるんだ…この予備タンクは、パイプの中の空気を抜く役割もしている。その予備タンクにどれくらいブレーキオイルが入っているかまたは入るかを知らない…あと、撮影中の事故だと言ってたよな！それなら転倒時前後の映像があるはずだ…なんとか入手できないか？」

「わかりました、至急調べます」

「分かったら教えてくれ」

「はい」

●親父の「めんどくせー」

S Kが帰った後、I Yが

「H Y姉さん」

「なに？」

「情報収集って、大変ですね…どこまで集めないといけないか、またどの情報が必要か…」

「そうですね…」

「親父は、それを的確にやってのけているんですね。少ない情報で的確な判断ができたんですよね」

「そうですね…でも、親父だって、最初から正しい情報を得ている訳じゃないし、何度も仮説を立てて行動して、別の情報に触れると、また新たな仮説を立て直していたわ」

「そうなんですか？」

「うん…I Y、F県領地の事件の事、覚えてる？（「巻き込まれ親父の撤退」「巻き込まれ親父の反撃」参照）」

「はい、あの時、私の『死にたがり願望』を解消してくれたのと、親父の作戦指揮を間近に見て、私はもっと教えて欲しいと思いました」

「あの時ね、事件当初の親父はF県領地で地図を片手にあっちこっち行って調べていたわ。私は親父と再び巡り合ったのは、親父が市街地で爆発現場と市街地の様子を調べている時だったの…丁度私がS県領地の実家に居るのが嫌になって、F県領地のショッピングモールに行ったときにね…」

と言って、H Yは瞑目して話を続ける。

「最初、親父はあの『狸と貉（元C国大使と元外務大臣）』を狙ったテロと仮説を立てて、

テロリストが居そうな場所と爆破現場を見て回ったそうよ…でも爆発現場の様子を見て何が爆破対象か分からなかったらしいわ…その時点では親父はある程度仮説を立てていたんだけど、その後の幹線道路を始め裏街道まで閉鎖されているのを見て、なにかもつと大きな事があると感じたらしいの…で山中に向かう事にして、途中のドライブインで、今まで集めた情報を基にわたしやT.T.を交えて例の親父モードの話し合いしたんだけど、まとまらなくてね、市街地は危険だからと山中の温泉に宿泊して、地図を眺めながらまた親父モードの話し合い…そこである仮説が立てられて、それがMOX燃料の奪取」

「そんなことがあったのですね」

「そこから、親父は自分の仮説を修正して、その仮説が正しいかに対する新たな情報をえるために移動している最中に、I.F.隊長とY.M.支部長に出くわした…親父は最初I.F.隊長達に関わりたくなかったみたいだけど、I.F.隊長達の境遇を聞いて、親父の「めんどくせー」が出て皆を無事助けるために一旦O.県領地に逃げる作戦を考えたわ」

「あのー、H.Y.姉さん」

I.Y.はH.Y.に恐る恐る訊ねた。

「なに？」

「親父の「めんどくせー」を私も聞いたことありますが、あれ何ですか？それから「しちめんどくせー」と言うのも…」

首を傾げて言うI.Y.に、H.Y.は頷いて

「あの親父の「めんどくせー」というのはね、親父の中では大抵現在の問題について解決が用意されているのよ。また親父が「しちめんどくせー」と言うと、その目の前の問題が既に解決しているのよ…まあ、親父本人が解決まで見据えたものの、それを実行するのが面倒臭いと思って言っているのよ」

「そーなんですか？」

とIYが応じた。

「だって、わたし昔、会社の部隊長の初陣の戦場で、敵の猛攻に遭って壊滅に近い状況になり、パニックになって、当時近くで別の作戦している親父に泣き言言ったら、＂しちめんどくせー＂と言われて、死にかけたわ…」

「えっ？」

HYの話にIYは驚いた。

「もつとも、親父の＂しちめんどくせー＂がなかったら、わたしは部隊毎全滅して、ここに居ないけど」

と言って、HYは目をつぶって手を合わせた。

「そーだったんですね」

「だから、あなたがIF隊長に合流した後、親父は日和見保身内密主義の上層部の事など一切無視して、O県領地に逃げる作戦を開始しようとしたけど、一旦思い留まって、次のステップについてまた仮説を立てて、YM支部長を連れて市街地や北の海岸、更に核施設へと偵察に行つて、YM支部長の話から、自分…いえ、わたし達の立てた仮説について確証を得た上でO県領地に逃げたのよ。そしてO県領地の海軍基地の協力を得て、あの＂狸と貉＂を捕獲したのよ」

「…」

「だからね、親父があれだけ大きな作戦がたてる事ができたのは、まず現場を検証して仮説立て、それが新しい情報を得て間違っていたら、何度も検証してから仮説を立て直して、都度見直して検証するのを繰り返し…そうしてある程度の確証が得られたところで、事件は解決するの！親父はそれを過去に多くやっていたから、情報収集についても何が必要かがある程度のカンで必要最低限を集める事ができるの」

「と、言う事は…」

「そう！CEさんの事件が何を元に起こったかの仮説を立てるための今は検証の状態！その為の情報収集。それも、キチンとした情報が揃うまで何度も…それに加えてわたし達はその情報が正確に分析できる人物を巻き込んで依頼すること」

「…だから、軍曹…」

「そーよ」

●時間差

HYはIYを連れて再度コンテナ埠頭に行くが、既に警察が現場検証を始めていた。事故現場には規制線が貼られ、現場に立ち入る事ができなかった。（しまった、遅かった！）と思ひ、規制線の前で立ちすくむHYとIY…そこに、

「あら、HYさんとIYさん…」

規制線の前にいる女性警察官が二人に話しかけてきた。

「…あなたは？…あつ」

と言って、IYが見ると港町水上警察署（事故現場のコンテナ埠頭は、ここの所轄）の女性警察で、休日は白山亭でアルバイトをしている一人であった。IY達が見慣れた白山亭の女給服姿ではなく女性警察官の制服を着ていたので、分からなかった。

「あはっ…この格好では分かりづらいですね。港町水上警察署交通課のMSよ」

と言って女性警察官MSは被っている帽子を上げた。IYは

「現場で事故を起こしたCEの所属する芸能事務所〇×エージェンシーの社長さん、中に居ますか？」

「その人なら、病院から戻ってきて、いまあそこの中で話を聞かれているわ」

と言ってMSは、一台のワンボックス車タイプの警察車両を指した。

「用事なの？CEさんの件？それともIMさんの件？」

「ええ」

I Yは警戒して、口を濁した。

「…終わったら呼んでこようか…内緒で」

と女性警察官は小声で言った。

「お願いできますか？」

とI Yが言うと、M Sは頷いた。

「ところで、事故車両はどこにあるのですか？」

とI Yが訊ねると、

「あそこのブルーシートの中…でも、もうじき署に運ばれるけど…なにか？」

「…どちらかと言うと、事故車両の方に用があつて…」

「なにかあるの？」

「…」

I Yはまだ警戒していた。M Sは真顔で

「なにかあつたのね…私に協力できる事があれば協力するわ…大丈夫よ、あなたたちの仕事にクライアントとの守秘義務契約がある事自体知ってるわよ。店内でよく社長達がクライアントと話をしているのが聞こえてきたりするけど、こっちも店を出たら忘れて黙っているのよ。店内ではアルバイトも仕事中は碇屋のエージェント気取りでいようと、アルバイト仲間の間で暗黙のルールがあるのよ」

と言って、笑った。それを聞いて、I Yは決心してH Yを見ると、H Yも黙って頷いた

「…なんか細工されている様でして」

「えっ！」

と言って、声を上げそうになったが、慌てて自ら口を塞いだ。

「なにになに？事故じゃなくて事件？」

「まだ確証がないのですが…ウチのTY（外部の人なので“先輩”を付けない）が事故車両を見て細工してあるのを見つけまして…」

と言って、IYは自分のスマートフォンでHYが撮影した写真をこっそり見せる。

「なに…これ…ホントに？」

と言ってMSは、何かを思いつき、

「だったら、署に先に行つて、向こうの鑑識科の仲間のAKに連絡しておくから…大丈夫よ、彼女もお店でアルバイトしてる仲間だから」

「ありがとうございます。私は港町水上警察署に行きます。姉さんはMK社長と…」

「ええ…」

IYとHYは二手に分かれた。

●HYの調査

HYはMSの手引きでMK社長と規制線を挟んで合う事ができた。

「MK社長」

「わたしに用ってなに？ひょっとしてIYちゃんの事？」

MK社長は、以前HGがIYについてIMの警護任務を完了しても、IMがまだIYを返さなくて一緒に居る事について話をしていたので、HYがその事を言っていると思っていた。

「いえ、IYは返してもらいました…ただ、そのう…ちょっと強引な事しましたので…あはは」

とHYが苦笑いすると、

「わかったわ、IMにはわたしから話をしとくわ」

と言って、MK社長が立ち去ろうとしたので、HYが慌てて

「あとですね、C Eさんの事で…」

「なに？C E？」

M社長は驚いて振り向く

「はい、実はウチのT YからC Eさんが撮影に使用したバイクに何か細工がしてあったと報告を受けたもので…」

「細工？バイクに？」

「はい…」

と言って、H Yはスマートフォンで撮影した事故車両の写真を見せた

「これは、1時間程前にわたしがT Yの報告を受けてから、スタッフをお願いしてその事故車両を撮影したものです」

「？？」

「社内で検証した結果、ブレーキの油圧パイプに人的な細工がされていて、徐々にブレーキオイルが漏れ出す様になっていると、車両に詳しい人が言っていました」

「そーなの？」

「なので、このC Eさんの事は事故ではなく、事件だと我々は認識しています。何かC Eさんについてご存じの事があれば教えていただきませんか？」

「うーん、そうねえ…」

M K社長は何か知っている様だったが、口ごもった…事故が事件になって、マスコミやライバル会社に突き上げられるのを恐れているのではないかとH Yは思った。

「お願いします！C Eさんの命にかかわる事です」

H Yは得意の上目づかいでM K社長を見る。それを見たM K社長はH Yに根負けして、

「…はいはい、わかりました」

と言って、M K社長はC Eとスタントチームとの確執について知っている事を話し出した

…CEはスタントマン上がりの女優であるため、日頃からのスタントチームに妬まれていた。特に元同僚のスタントマンDRは同じ女性としてCEに対しての嫉妬が強くて、日頃から『CEが女優になれて、わたしがなれないのは何で？わたしの方がスタントの腕もいいし、バイクも乗りこなせるし…』と、CEに対抗意識をむき出しにしていたと話をした。

HYはそれを聞いて、SKの指示をMK社長に訊ねてみた。

「それからですね…もう一つお願いがあるのですが…」

「为什么呢？」

「CEさんの事故は撮影中と聞いております。事故当時の映像を見せていただけないでしょうか…」

HYは恐る恐るまた得意の上目遣いをした。それを見たMK社長は

「…うーん、見せてあげたいけど…」

と言って頭を掻いた。それを見てHYはMK社長がこちらに見せられない理由があると直感した。

「なにか、わたし達が見られない理由があるみたいですね」

「そーなの…実は警察に証拠として提出しちゃって…」

「…ああ成程、そういう事ですか…（しまった！）」

「ごめんなさいね。警察から映像が戻って来たら、見せてあげるわ」

「ありがとうございます」

HYは規制線の向こうに歩いて行くMK社長を見送って、（警察なら、MSさんとかIYに頼むしかないわね）と考え、IYに『事故映像は証拠として警察に提出した。そちらで借りられないか聞いて欲しい』とメールした。

MK社長が立ち去った後、それとなくHYに近寄ってきたMSに

「どうでした？」

訊ねられ、事故映像は警察に提出した事を話すと、

「それは、私の出番ね。何を調べればいい？」

「出来れば事故発生時のC Eさんの反応…ブレーキが効かなくなっただけなのか詳しく知りたいのと、路面の状態とか…本当は、わたし達が見られるといいんだけど」

「…それはチョット…もし事件なら、大事な証拠になるので、問題の映像は裁判が終わっても持ち主には戻らないですね…逆にコピーとかバックアップとかないかしら、今の映像って、昔のフィルムと違ってデジタルカメラで撮影するでしょ？データになっていますよね」それを聞いて、HYは（エッ？MK社長は、多分撮影スタッフが事故映像のバックアップを持っている事を知らない？…それとも知っていて隠してる？…いずれにせよ、MK社長から事故映像は入手できないわね）と考え、

「あなたが映像データをコピーしてくれるとありがたい…かなあ？」

とHYはMSに上目ずかいで訊いた。

「ごめんなさい…それをやったら、捜査情報の不当漏洩で私が懲戒解雇されちゃうの！」

MSは困った顔をして言うと、HYは（そうよね…そこまでして貰ったら、MSさんが大変な事になるわね）と考え、

「アハハ！そーよねえー…冗談だから忘れてね」

とMSに言つて、「（あゝ、駆け引きの順番間違えたー！どくしよう！！先に映像データの入手してから、CEさんのバイクの細工についてMK社長に話をするべきだった）と落ち込んだ。

● I Y の調査

I Yは、港町水上警察署に行つて、コンテナ埠頭に居る仲間のMSから連絡を受けていた鑑識課の女性警察官AKと会う事ができた。

「MSから聞いてますよ、IYさん、CEさんの撮影に使用したバイクに細工がされているんですってね」

「そうなんです」

と言って、IYはHYがスマートフォンで撮影した写真を見せた。それを見たAKは、

「この付近ね…確認しておくわ」

やがてCEが乗って事故を起こした撮影用バイクが運ばれてきた。IYはAKと搬入作業を見ていた。

鑑識作業が始まると、さすがに部外者のIYは立ち入れないので、港町水上警察署の受付の椅子に座って待っていた。

やがて、AKがIYの所に来た。

「どうですか？」

「うーん、見たけど…」

「？」

「油圧パイプに細工された形跡が見つからないの…」

「なんですとく？そんなバカな!!」

「あゝ、安心して。油圧パイプに細工された形跡は見つからなかったけど、油圧パイプ自体が、あなたが見せてくれた写真と違う物になっていたので、あの写真が正しければ、多分事故現場で交換されたと思う」

「なぜですか？」

「それを調べるのは、私達の仕事よ！任せて、わかったら連絡するから…IYさんもなにか掴んだら私に教えてね」

「…あと、油圧系統のセンサー類に細工がされているのでないかと話を聞きました」

「そう…それは、見ただけでは分からないから、時間がかかるわね。注意して見るわ」

「はい、でもくれぐれも…」

「分かってるわよ、署には内緒ね」

「ありがとうございます。それから、バイクのメーカーと排気量と型式って言うのですか？
教えてくれますか？」

「それなら今分かるわよ、K社のバイクで排気量は400CC、型式はC〇〇の××年式」

「ありがとうございます…それから、あと…」

「なに？」

「ウチのHYから、CEさんの所属する芸能事務所〇×エージェンシーのMK社長さんからそちらに証拠として提出した事故映像の画像を借りることが出来ないか聞かれています…」

「ごめんなさいね…それやったら、私がクビになるの…」

とAKはIYに手を合わせて言った。

白山亭…

IYは男屋に行き、SKにバイクのメーカーと排気量と型式について話すと

「…なんだ？400CCかよ！白バイは基本750CC以上なんだけど…CEは中型免許しか持っていないのか？よくそれで、バイクスタントのアクション女優気取れるな。まあそれだけ分かったら、ある程度予想できるから、こっちで解析する」

とSKは毒舌で言い放った。IYは（そういうモノなんだ…）と思い、

「ありがとうございます。CEの運転免許については、こちらで調べます。あと事故の画像は警察に提出したので見ることが出来ないと言われました」

と言った。それを聞いて、SKは

「撮影スタッフが映像データのバックアップ持ってんじゃねえのか？…昔のフィルムじゃ

あるまいし！」

と言ったところで、S Kはハタと思い直し、

「…でも、それをこちらが入手したら、あの事故が殺人未遂事件になって、検察に映像が証拠物件として渡ると、それを持っているこつちがヤバイことになりそうだから、その映像入手は諦めよう…仕方あんめえ…」

と言った。

I Yは（C Eさんの免許については…本人に直接聞くのが一番いいけど…軍曹があんなに言うくらいだから、直接聞いても多分教えてくれないかな…それなら…）と考え、I YはT Yと港町水上警察署交通課のM Sに聞いてみることにした。

T Yからの返事は『警護中にお互いライダーだから、バイクツーリング話をして話の流れから普段乗っているバイクについて話をするし、マンションに止めているバイクを見せてもらった事あるけど、本人は400CCのバイクを運転しているわよ。けど運転免許証は見たことが無いわね。聞き出してみる』と返ってきた。

一方、M Sからの返事は『運転免許証にはバイクは中型』との事。

暫くしてT Yの報告も『C Eさんから免許見せてもらった…中型』。

それを母屋に居るH Yに話したら、H Yは

「軍曹の言う通りね…C Eさんバイクの免許が中型でバイクアクションやっているからそれを隠しているのね…多分、事故映像の画像も…それが外部にバレたら、週刊誌とかライバル芸能事務所に叩かれて大変な事になるでしょうし、限定解除なら、親父が持っている「特別銃器携帯・使用許可証（H Gは限定解除を持っています）」みたいにそれとなく自慢するもの…」

「あつ、そうですね…親父は特別銃器携帯・使用許可証の「限定解除」をよく見せてくれま

したね（見せびらかしたとは言わない。作者）

と言ってIYは納得した。

「それからね、事故映像はわたしもMSさんに当たってみたけど、流石にMSさんを犠牲にしてまでは…これは、わたしの完全な初動ミスだったわ…事故現場でMK社長と話をして
いる時に、先に映像データの入手をしてから、CEさんのバイクの細工についてMK社長に
話をするべきだった…駆け引きの順番間違えたわ…ごめんなさいね」

と言って、HYは項垂れる。

「本当に情報収集って、大変ですね…」

IYもしみじみ言うのと、

「…軍曹の言う通り、諦めましょう…」

「はい…」

●MP戻る

夕方、HYのスマートフォンの着信音が鳴る。相手はMP

「はい」

『D国大使館での用事済んだネ、これから帰るネ』

「はい、気を付けてね」

『ハインネ』

MPが母屋に戻ってきた。

「MPお帰り」

「タダイマデス」

「D国大使館行ってたのね」

「ハイネ、D国エージェント機関DSFの新しい防弾インナーについての話についてシャチョーの代理で行っていたネ」

「どうだったの？」

「インナー蒸れる…これ向こう（D国）でも問題だったネ。特に、オンナ用した…」

と言って、MPは自分の下半身を指した。

「あら…そう…」と言って、HYは（女性の悩みは、洋の東西同じなのね）と思った。

「で…あっちのメーカーに改良させるって言ってたネ」

「それは良かったわ、ところで、MZさんとは？」

「…あんな奴シラン！」

と言って、MPはソッポを向いた。HYは（また、MZさんと喧嘩したのね）と思った。

「そういえば、シャチョーどした？出かけてる力？電話しても通じないネ…」

「あのね…MP」

HYが深刻そうな顔をしたので、MPは驚き

「シャチョーなにかあったカ！」

「…うん、実は昨晚、車で事故を起こして…」

「ナント！」

「今、意識不明で、帝都の病院に入院してるわ…」

「エエッ！」

MPは顔を紅潮させた

「シャチョーの居る病院どこ？」

今にもそのまま走ってHGの入院している帝都内の病院に行きそうな勢いだったので、

HYはMPに抱きつき、そのまま引きずられながら

「ちよ、ちよつと落ち着いて…MP！」

とH Yが慌てて言うと、M Pはハッとして

「ゴメンナサイ、ワタシ取り乱したネ」

と言って、抱き着いているH Yを優しく抱きしめ、頭を撫でる…（この光景…どこかで見たような…笑）作者）

「M P…」

「ハイネ」

「あのね、親父が入院した事。内緒にしてくれる？特にD国エージェント機関D S Fには…」

H Y言葉を聞いて、M Pは

「分かったネ…シャチョー入院したと知ったら、あいづら何するか分からないネ」

「ありがと…それから、わたしの頭を撫でるのやめてくれる？」

「なんで？H Yの頭、ワタシにとって、丁度いい位置」

「…（怒）」

H YはM Pが自分の頭を撫でている手を振りほどき、

「あとね、T Yが警護任務に就いているC Eさんね…撮影中に事故起こしたの」

「ナント！で、C Eさんどした？」

「スタントマンから女優になった人だから、幸い軽症で済んでいるわ」

「そーなの？よかったネ」

「でもね、C Eさんの乗った撮影用のバイクのブレーキに細工がしてあって…どうやらC Eさんを事故に見せかけようとしたらしいの」

「ナント！」

「でね、親父が居ない今、私達娘と息子達が協力して事件を解決しようとしているの、だからあんたも協力してね」

「ハイネ！H Yネーちゃん」

●A M 戻る

夜、H Yのスマートフォンの着信音が鳴る。相手はA M

「はい、どうしたの？」

『いや、O T殿下の警護任務が終わったんですけど、准尉のスマートフォンにいくら連絡しても出ないので…』

それを聞いてH Yは（あっ！准尉のスマホ…今どこにあるのかしら…病院？警察？それとも愛車と運命を共にした？…）と慌てた。

『H Y先輩、どうしましたか？』

A Mの問いかけに、H Yは我に返り、

「あっ…いや、ゴメン…今どこ？迎えに行くわ」

『今、帝都の皇王省の正門前です。迎えに来ていただけるのなら、正門の向かいの通りに喫茶店があるので、そこで待ちますけど』

「分かったわ、そこで待っててね」

『はい』

H Yはスマートフォンの通話を切ると「ふう…」と言って深いため息をついた。それを見たI Yは

「姉さん疲れているのでは？A M先輩の迎えは私が行きます」

と言うと、H Yは首を横に振って

「そうね…いや、やっぱりわたしが行くわ。親父が入院した話をしないといけないから…M Pみたいに暴れはしないでしょうけど…（笑）、こういう時は年上が言った方がいいのよ」

「はい…気を付けて…姉さんまで親父の様になったら、困ります」

「ハッキリ言うのね！帰りはA Mにでも運転させるわ。留守を頼むわね」

「ハハ、行つてらっしゃい」

I Yは手を振った。

帝都の皇王省の正門前…

H Yは片側3車線の幹線道路を挟んだ反対側にある喫茶店の前に車を停車させた。

「H Y先輩！」

「喫茶店のオープン席に座っていたA Mが手を上げる」

「待たせてごめんね！乗って！！」

ここは、駐停車禁止なので、H Yは助手席の窓を開けて言った。A Mはカードレールを、両手にコーヒーマグのテイクアウト容器を持ったまま飛び越える。それを見たH Yは（凄い運動能力ね…）と感心した。A Mが助手席に乗り込むとH Yはすぐに車を発進させた。

「ごめんね、待たせて」

「いや、別にいいですけど…はい、H Y先輩」

と言って、A Mは持っているテイクアウトのコーヒーマグの容器を差し出す。

「ありがと、今は運転中だから、そのドリンクトレイに置いてくれる？」

「はい」

暫く車を走らせて、信号待ちをしている時に、

「あのね…実はね親父…じゃなかった准尉が交通事故でね…」

「えっ？」

「意識不明で入院してて、今ICUに居るの…」

「またまた、H Y姐さん…冗談を…」

A MはH Yの話を自分をイジル為の触りとして言うと、

「ホントなのよ!!」

とHYが叫ぶように言うと、信号が変わり、後ろの車からクラクションを鳴らされる。慌てて車を急発進させるHY…それを見てAMは

「姐さん、落ち着いて!」

「…ゴメン!」

HYの態度から、HGの入院の話は本当の事だと思い、

「分かりました。准尉は入院しているんですね」

AMは車窓の窓の外を見ながら言った。

「そう…帰り道の途中で准尉が入院している病院があるの…でも、もう遅いから寄れないわね…」

「そうですね…」

AMは力なく答える。HYは（AMも親父の事心配してるのね…）と感じた。

「あとね…悪い話が続くけど、TYの所でCEさんが撮影中に事故で入院してね…それが事件の疑いがあるから、今私達で調べてんの」

とHYが言うが、

「そ…すか…自分も手伝いますよ」

と相変わらず気の抜けた返事をするので、

「当たり前でしょ!あなたもあの親父の息子になったんだから!!」

と、HYは怒ってAMに且を入れるように言うと、AMはHYの方に向いて、持ち前の調子の良さで、

「そうでした。なんなりと姉さん」

と言って、HYとAMは車の中で笑った。

●事件検証

Y 国際港輸出入用車両モータープール（C E のロケは、Y 国際港コンテナ埠頭です）：

「いくよ！ I A ！！」

「はいな、姐さん！」

ドラマの撮影スタッフから入手した絵コンテに基づき、C E が事故を起こしたシーンの再現を行った。

H Y が操縦するドローンの映像から、トレーラーの向きを確認して

「はい、45度！止めて下さい」

とI Yが言うと、それを合図にT Yがバイクのブレーキを操作した。

バイクにはあらかじめ、H Yが撮影した写真と同じように、バイクの油圧パイプに傷をつけてある。このテストでどの位ブレーキ油が減っているかを調べた。そのために、わざわざ撮影に使用したバイクと同型のバイクをT Yの伝手で、港町商店街にあるバイクショップに事情を話して貸してもらった。それから、同型のトレーラーまでレンタルした。

結果、一度の撮影ではそんなにブレーキ油が減っていないことが分かった。

「変ねえ…」

H Yは油の減った量についてT Yから報告を受けると、男屋に居るS Kに連絡した。

『どんぐらい減った？』

「ほんの少し…」

『そうじゃない！正確な値は…T Yに代われ！』

「T Yです。減った量は…ほんの×C C位です」

『そうか…予想通りだな…』

H YのスマートフォンをハンズフリーモードにしてT Yが話すと、S Kの言葉にH Yは、理解が出来ず戸惑った。

「…どういことですか？」

とH YがS Kに訊ねると、

『一度や二度のプレーで、ブレーキオイルが抜けたら、路面にオイルが残って故障として修理されるだろ』

「はい、そうですね」

H Yにはなんだか分からなかったが、返事をした。

『本番が始まるまで、何度かリハーサルとかで試走したろ』

T Yは、事故当時の事を思い出しながら、

「…はい、そういえば…」

『直前まで誰が転がして（運転して）いた？』

「えーと、確かスタントチームの人…D Rさん。C Eと同じ女性で年恰好も近い人でした」

『そいつが犯人とは断定できないが、H Yの話だとかなりC Eに対する嫉妬や対抗意識があるそうじゃないか』

「はい」

『そのD Rって奴には、注意した方がいいと俺は思うぞ…じゃ、実験続けてくれ』

「はい」

S Kとの通話が終わると、

「姉さん、スタントチームには誰か行かせてます？」

I YがH Yに訊ねる。

「A Mに事務所を見張らせているわ…あの子A国で探偵のアシスタントしていたから」

「M Pは？」

「コンテナ埠頭に行ってもらってる。事故現場で何か見つけられないかと」

「そうですね…取り換えられた油圧パイプが見つかれば、一番嬉しいんですけど…」

と、I Aが言うと、H YとI Yは呆れて、

「なにを能天気に！」

I Aがシュンとしていると、H Yのスマートフォンの着信音になる。

「はい」

『A Mです』

「ご苦勞様」

『いま、スタントチームの事務所からバイクが出て行きました』

「乗っている人、判る？」

『女性としか…事務所から出てきた時にはヘルメット被ってたんで…追跡しますか？』

A Mの言葉に、H Yはバイクで行ったのはD Rと直感し、A Mに追跡を指示しようかと思っただが、果たしてD Rの単独犯行なのか自信がなかったので、D Rが何か持って帰ってきたら、A Mに調べさせようと考え、

「うーん、ありがとう、でもそのまま見張ってて。戻ってきたら、連絡頂戴」

『はい』

A Mとのやり取りを聞いていた、I Y、

「スタントチームの事務所…確か警察の捜索が入ったんですよね」

「そうね…M Sさんの話では事故車両の点検記録とか運行記録の押収…また撮影用に市販のバイクを白バイに仕立てたバイクカスタムの会社も同じく立入りがあったそうよ」

「なにか見つかったんですか？」

「M Sさんの話だと、A Kさんがそれとなくブレーキ周りの部品の廃棄在庫に注意する様に捜査官に耳打ちしたそうよ…」

「だれです？」

「それがね…あなたが良く知ってる人！」

「ゲッ！まさかK J？」

…皆さん忘れているようですけど、彼は港町水上警察署の捜査官です(笑)作者

「ピンポン！…彼張り切って行っただけ、なにも見つからなかったって(笑)」

H Yが笑いながら言うと、

「…良かった…」

とI Yが安堵の表情をした。

「あら、彼が見つけてくれた方がお互い良かったのに…」

「あれ(K J)には死んでも借りは作りたくありません！」

「可哀想…K J君…」

「だったら、姉さんにあげますけど？」

I YがH Yに厭味ったらしく言うと、

「あら…ヤダ、こんなオバチャンに…それにわたしには親父がいるから…」

と顔を赤らめて言うH Yに、I Yは(ここで、『オバチャン』言うんだ…えっ？親父って…なんですと！)とI YはH Yに突っ込みと嫉妬を同時にした。

●チェイス

コンテナ埠頭で事故現場を見ているM P…現場には警察が事故検証したチョークの跡がまだ残っていた。

バイクのスタート位置から転倒箇所に向かって歩き出す。

「軍曹の話…『バイク走った跡を撮影してきてくれ』だけ…タイヤ跡はあるけど油の漏れた跡ないネ…」

M Pはスマートフォンのカメラを録画にして歩く。

「バイクのブレーキの跡はないネ…」

転倒箇所には警察が事故検証時に残したチョーク跡も含めて撮影していた。

その時、コンテナ埠頭の入り口からバイクのエンジン音が聞こえたので、MPは急いでコンテナの陰に隠れた。

MPはスマートフォンでHYに電話をする。

『はい』

「HYネーちゃん…事故現場にダレカきた」

『なんですって？誰？カメラにできる？』

「分かったネ」

と言って、MPはスマートフォンを近づいて来るバイクに向けカメラをテレビ会議モードにした。

MPが居るにも関わらず、バイクは事故現場に近いコンテナの側にバイクを止めた。

HY達は、MPのスマートフォンから送られてくる画像を見ていた。

バイクを降りたライダーはヘルメットを脱いだ。それをMPのスマートフォン越しに見たHY達…その中のTYが

「ちょっと、MPズームして！」

と言った。

『ハイネ』

MPがスマートフォンのカメラをズームする。するとTYが

「DRさんだ！」

「えっ？TYそれ本当？」

「はい姉さん、間違いありません」

TYの返事に、HYはふとIAが『そうですね…取り換えられた油圧パイプが見つかれば、一番嬉しいんですけど…』と言ったことを思い出し、

「ちよつとMP、聞いて」

HYがMPに呼びかける

『ハイネ』

「あの人が、何か拾ったら、迷わずそれを奪うのよ！」

『ハイネ、オネーチャン！』

MPはスマートフォンを切ると、まるでアメリカンフットボールのクォーターバックの選手がする姿勢をして構えた。

DRがバイクを止めた側のコンテナの下をライト片手に探っている。MPは飛び出す機会を伺っていた。

DRがコンテナ下から何か細いひも状の物を拾い上げたのを確認して

「ウオッッ」

と叫んで飛び出す。

DRはまるで猛牛が向かって来る様なMPを見て驚くとヘルメットを被らずにバイクに飛び乗り走り出す。MPは寸でのところでDRを逃がす。

「逃さないネ」

MPはコンテナの陰に隠している自分のバイクに乗り、DRの追跡をはじめた。

この時DRのバイクの排気量は750CC、対するMPのバイクは1,500CC排気量…この差だけと言う訳では無いが、DRが蛇行したり、コンテナを回り込んでMPを巻こうとしたが、DRの体重が軽くてバイクのコントロールが思い通りにいきづらいのに対して、MPはそのガタイと馬鹿力で1,500CCの重量級バイクをねじ伏せるように操り、DR

との距離を詰める。

その内、D Rがコーナリング操作を誤って転倒すると、M PはD Rの倒れている所にバイクを止め。D Rの怪我の具合を確認した。D Rはスタンマンだけあり軽症で済んだ。

「なによ！あんたは？」

D RはM Pに怒鳴るが、D Rの怪我を気遣い、

「ダイジョブか？」

「フン！」

と心配するM Pに対してソップを向いた。

「手に持つてるモノ渡すネ」

「なに？あんた警察？…それともマスコミに雇われたエージェント？」

D 国人のM Pを見たら、そう思うであろう…

「ワタシ、碇屋のエージェントネ」

「えっ？…そ、それってC Eのボディガードの…」

「ワタシの同僚ネ」

「…分かったわよ！持っていきな」

D Rは観念して手に持った油圧パイプをM Pに渡した。M Pはそれを受け取ると

「立てるある力？」

と言って、M PはD Rに手を差し出す。D RはM Pの手を取ると引き起こされた。

「警察に行くんだろ？」

「ソレ、ワタシの任務違うネ」

「??」

「逃げられないから、自首するネ」

「…わかったよ…警察の前まで一緒に行ってよ」

「ハイネ」

D RはM Pに伴われ、港町水上警察署に自首した。

●H G意識が戻る

M Pから報告を受けたH Y。

「はい、M Pご苦労様…戻ってきて」

『ハイネ』

H YはA Mにも電話する。

「A M…事件は終わったわ…帰ってきて頂戴…ありがとうね」

『終わったんですね。すぐ戻ります』

H YはI Aに対して、

「あなたの言った通り…M Pからの報告では、現場に取り換えられた油圧パイプが隠されていたそうよ…あの時は、『なにを能天気にな！』って言ったけど、あなたの慧眼には、驚くばかりだわ…ごめんなさいね」

と言って、I Aに頭を下げると、I Yも

「私も同じく、ごめんなさいね」

と言って頭を下げた。それを見てI Aは恐縮して

「いえいえ…あれは本当に軽くあたしの希望を言っただけです…二人供頭を上げてください」

D Rは港町水上警察署に自首し、C Eに対しての個人的な恨みから犯行に及んだ旨を話した。しかし、取り調べが進むにつれ、D Rだけではなく、スタントチームがD Rに同情して手を貸していたことが判明した。

また、M Pが持ち帰ったブレーキの油圧パイプには、H Yが撮影した傷がついていて、それを港町水上警察署に証拠物件として提出した。油圧パイプはH Yが写真を撮影したのを知らずに、スタントチームが警察に押収される寸前で交換していた事が犯行に関わったスタントチームのメンバーの自白により判明した。

元々スタントチームは、シーン503の撮影で、C Eが乗ったバイクをトレーラーの手前に止めるためにバイクのブレーキをフルに掛けると考えていたが、C Eが撮影用の白バイを本番まで壊さない様にするために、トレーラーとC Eのバイクとの間の距離がありすぎて、C Eがフルにブレーキをかけなかった。そのためブレーキパイプは破裂する事が無かった。逆にD Rが本番前にC Eの乗るバイクを試走してブレーキパイプの細工を何度も確認していた際に、ブレーキパイプからオイルが染み出して居る事を確認したまでは良かったが、そのまま試走を続け、ブレーキパイプの中のオイルが抜けて、空気が入る直前でC Eと交代し、C Eもアラムランプ等ロクにチェックしないままシーン503の撮影に挑んでしまったため、結果今回のような事故に至ったと言う事が、後日M SとA Kの話から判明した。またそれを撮影した映像を見たA Kの話によると、“カーツト！”の掛け声が掛けられたから、C Eはブレーキを掛けたが、ブレーキが利かず、何度もブレーキを掛けたような動作をして、最後には自らバイクを横倒しにして、自身は転倒の衝撃に耐える姿勢を取っていたと教えてくれた。また、M Sからも、事情徴収に対して、C Eは『ブレーキが利かないので、自らバイクを倒して、自分はバイクから離れて体を確保した』と言う話をしていた事を聞いた。

T Yは引き続き、C Eの警護任務に復帰した。しかし、C Eが事故のせいでバイクの運転に精神的な支障がでたので、T Yが代役でバイクシーンの撮影を続け、またI Aと組んで、女性白バイ警察官が犯人の乗ったトレーラーを追跡して、トレーラーが正面を塞ぐパトカ

ーの列を避けようとして急ハンドルを切って横転するトレーラーの下の空間を自ら白バイごと倒してすり抜けるシーンも撮影してしまった。この時に撮影に使われたバイクは、撮影用の白バイではなく、『親友のIMを救出するのに、トレーラーを追跡する前に、敵の罠にかかり別の事件で壊した白バイではなく、仕方なく自分のバイク：7500ccのバイクを使用した』と撮影コンテと台本を書き換えた。

この後のシーンはバイクに乗るシーンはあまりなく、CEが白バイ警官の格好で拳銃を片手にフェリーの乗り込み人質役のIMを救出するシーンを撮り終え、ドラマはクランクアップになった。

その中でHGが意識を取り戻したという吉報がKMからもたらされた。

一般病棟に移されたHGにHYが面会しに行った。

HGが頭に包帯を巻いて、足にもギブスがあり、ベッドから出ていた。その姿を見たHY、自然に涙が出てHGに抱き着いた

「いって…」

HGの言葉を見無視して、HYはHGにしがみついて泣きじゃくる。HGは訳が分からずただ黙ってHYの締め付ける痛みを絶えていた。

HYが落ち着いたところを見計らって、

「HY…」

「はい」

「ただいま」

「お帰きなさい…親父」

と言って、また涙した。

「何かあったのか？」

「…はい、実は…」

H YはH GにC Eの事件について報告した。それを聞いたH Gは、H Yの目に浮かんでい
る涙を指でぬぐうと、

「大変だったな…よくやってれた」

と言って、H Yの頭に手を乗せて撫ぜた。

「…親父！」

「なんだ？」

「子ども扱いしないでくれます！」

H Yがむくれて言った。

数日後、白山亭内：

「なんか、探偵をしているみたいで、ワクワクしちゃった」

「私もよ、面白かったね」

港町水上警察署の女性警察官M SとA Kの二人が、店内で女給姿のまま会話していた。二
人を見つけたI Yが側に寄り、礼をいう。

「二人とも、ありがとうございます」

「「いえいえ」」

と言って、M SとA Kが謙遜する。

「そう言えば、H G社長意識が戻ったんですってね。良かったわね」

「はい、おかげさまで」

「社長が入院した翌日にアルバイトに来た私達にお宅の副社長（S Kの事、S Kは白山亭経
営とは無関係だが、便宜的に副社長と名乗った）の説明の後に、H Yさんが『社長が戻る場
所を守りましょう！』と言ったので、私達も心得て署に内緒で動いたのよ…バイト代弾んで

ね！」

とMSは言って、ウィンクした。

「はい…その件については社長が退院次第、自ら賞すると言っていました」

「やったー！」

「でも、良かったわよねCEさん、軽症ですぐに現場に復帰して撮影を再開するんだものとAKが言うと、（…あれ、TY姉さんなんだけど…）とIYは苦笑いした。

●HG退院

「うーん、病院で長い事寝たきり生活していたせいで体が鈍ったな…」

と言って、胸部と両足の骨折がまだ完治していないので、松葉杖について腰をさすりながら

HGは病院を退院して、KMの手助けで迎えに来たHYの車の後席に乗り込む。

「あら…ヤダー、すっかり老け込んで…もう」

KMが呆れて言うと、

「うるへー」

「さあ、帰りますよ」

とHYが言うと、

「頼む」

HYは病院の正面玄関に止めた車を出した。担当医と看護婦が手を振っていた。

車の中で

「准尉（親父から元に戻しました）、病院のICUに居た時って、どんな感じでした？」

「そうだな…なんか水の中を漂っている感じだったね…なにも聞こえない、白い世界…その内複数の手があちこちから伸びてきて、俺に手を差し伸べたんだ…その内のなにか見慣

れた手をいくつか掴んだら、突然引つ張られて気づいたらICUのベッドに居た…もし見知らぬ手を掴んだら、死んでたかもな…」

とHGがしみじみ言うと、HYは

「…そんな…」

と悲しそうに応じた。

「ところで…」

とHGが改まって、

「俺の車どうなった？」

「燃え尽きました…」

とHYがシレっと答えた。

「ナニー！」

「そんなに興奮したら、怪我に響きますよ」

HYは笑いながら言った。

「あの車…気に行ってただけ…大事にしてたのに…」

と言って、HGはしよげる

「あら、私達娘とどちらが大切ですか？」

HGの言葉に嫉妬して、HYが訊ねると、HGは一瞬悩んで

「…無論…娘ども…と今は息子も居るか…」

「何ですか、その間は？…まあいいです。私達が大事と言っていただければ」

「うむ」

「廃車と保険の手続きについては、軍曹が全て行ってくださいました」

「そうか…で、俺のスマホは？」

「車と運命を共にしました…」

「何だつて〜!」

「こちらの方は、私達が手続きしておきました…ハイ」

と言って、HYは助手席にある新品のスマートフォンの箱をHGにノールックで投げ渡す。箱はHGが上手く受け取った。

「ありがとうよ! データはクラウドにバックアップしてあるから…」

それを聞いてHYは(アッ! 事故映像はもしかして…)と思いついたが、SKの言葉を思い出し、それ以上の追及はしないことにした。

「それから、准尉に追突したトラック運転手は、過重労働の上に過積載の上、業務上過失で逮捕されたそうです」

と言うと、

「そうか…こっちは死にかけたが、同情するね」

「そうですね」

HYが白山亭の正面に車を付ける。IYを始めとする白山亭の女給服を来た娘達とTT、

SK、IIが出迎えた。

「准尉! すみませんでした!!」

いきなりIYがHGの元に歩み寄り頭を下げた。

「なんだ? 一体?」

「はい、准尉が事故で入院したのを知らず、私はIMと任務が終わったにも関わらず、一緒に居ました。その事をお詫びします」

「…そうだったな…反省したか?」

「はい!」

●スペシャル連続ドラマ「女性歌手の乗船したフェリー乗っ取り事件、テロリストに乗っ取られたフェリー…果たして親友の白バイ警官は彼女を助け出せるのか!？」（なげータイトルだな笑）

「HG社長、退院おめでとうございます」

IMとCEが母屋でまだ横になっている事が多いHGを見舞った。

「…お見舞いありがとうございます」

二人から見舞いの品と花束を受け取る。横でHYが介助する。IMが

「HG社長…どうもすみませんでした」

「はて？」

「いや、社長が入院していたのにも関わらず、IYを引き留め続けていたので…」

「はは、それはどうも」

とHGは、苦笑するが、ふと、

「それはそうと、ドラマ好調の様だね」

「はい、おかげさまで高視聴率をマークしています」

とCEが言う。

「あのスタントシーンはいいね…うまいと思う」

HGが褒めると

「…そう言っただけで…彼女も喜ぶでしょう!」

「?」

「…あの実は、あのスタントシーンの…特に後半はお宅のTYさんが演じたので…」

「ナニー!」

と言って、HGは驚いた。それを見てIMが

「あたしは、CEが白バイ警官姿ではなくて、あたしが本当にあの事件にあった（「巻き込

まれ親父の突入」参照)時の様に、ここ白山亭の女給姿に変装して救い出して欲しかったな」と言うのと、C Eも同調して

「そうだったのよ…私もあなたの話を聞いて、I YさんやT Yさんの様にこの女給姿に変装して活躍したかったわ…」

「あんたもそう思ってたんだ」

「そうよ、それが残念で…脚本を書いた作家に文句言つてやりたい!…だって、実際の事件をベースにしたら、なにも白バイなんて要らないじゃない」

「アハハ!そうかもね…でも、バイクアクションシーン抜いたら、あんた目立たないじゃん」

「…あなた、そこまで言う?…まあ、そうなんだけどね…」

と言って、C Eはしよげる…

「ごめーん」

I Mが言い過ぎたのを詫びると、

「いや、バイクスタント抜きでも、格闘戦とかのアクションシーンがあるから…」

「おっと、前向きね」

「そーよ、歌手が本業のあなたと違って、ドラマ一筋の女優だもの」

「うん…頑張ろう!お互いに」

「そうね」

と言って、I MとC Eは手を取り合った。そして、I Mは思いついた様に、H Gに対して

「…そうだ、折角ここに来たんだから、あんたこの女給服着てみない?いいでしょ?社

長!」

と言うと、H Gは素直に

「はい、いいですよ」

「やったー!」

と喜ぶIMを見て

「HY」

「はい」

「CEさんの着付け手伝ってあげて」

「はい」

「ねえ、社長、あたしもー」

とおねだりするIMにも

「はいはい」

その日、白山亭ではスペシャルドラマ番組宣伝と銘打って、IMとCEの女給姿の共演があった。(CEは模造銃持ったり…作者(笑))

●エピローグ、AMの副業とMZ轟沈

「准尉、お帰りなさいませ」

HGが葛葉組への所要から戻り白山亭の扉を開けると、AMがバトラースーツ(執事の服)姿で出迎えた。

「何やってる？AM、ピン芸人デビューの練習か？」

「あのですね…自分ピン芸人になりませんから…お客様から『女給姿の女の子達の接待もいいけど、一人くらい男性の給仕が居てもいいかも…』と言う、アンケートがあつて、以前からホールスタッフ姿でウェイターをしていましたが、『できれば執事姿で…』と言うアンケートが多く出だったので、自分は反対しました。そうしたら、IIさんが『じゃ、私がやろう!』と言い出し、次にTTさんが『私男装したいから、私やるわ!』と言い出し、IYまでも『TT先輩が男装するなら、私がやります!』と言い出したので、自分が『なら、自分が…』と言ったら、『『どーぞ、どーぞ!』と…で、結局、HY先輩に『あんた(AM)』

「やんなさいよ!』と言われました…」

「よく、女装させられなかったな…」

「アハハ!」

と言って、A Mは苦笑いした。

その時、白山亭の入り口ドアが開き、

「いらつしやいませ…これはM Z様、ようこそ白山亭へ」

入店してきたM Zを丁寧に向かい入れるA M…A Mの格好と仕草を見たM Zが口に手を当てて頬を赤らめる。

この日、M ZはM Pに対する毒舌も出ず、またH Gとの掛け合い漫才にも応じず、まるで借りてきた猫の様に振る舞った。

M Zが帰った後、

「すごいなA M…礼儀作法に品を感じる。またあのM Zの毒舌を封じたのは見事だな…」
とH Gが感心して言うと、

「…いやあ…A 国ではセレブ達のパーティーなどでボディガードとしてクライアントをエスコートしたり、高級邸宅での住み込み用心棒などしてましたので、必要なスキルとして身につけました」

それを聞いて、

「それなら、ここで働く女給達に仕草やマナーを教えてやってはくれないか?無論、授業料は出す」

「はい、喜んで!」

A Mは基礎ができているI Y (I Yは元侯爵令嬢です)と協力して白山亭の2階のホールを使用して、まずはH Gの娘達からレッスンを始め、次にパート・アルバイトの女給、続い

てT・T・I・Iにもレッスンを実施した。

アルバイトの総合病院の看護師や港町・水上両警察署の女性警官達に好評で、その内、別にレッスン料貰ったのクエストでテーブルマナーやビジネスマナーについても教えだした。

その間に白山亭に遊びに来たI・MやC・Eの目に留まり、M・K社長に話したことから、彼女達の所属する芸能事務所〇×エージェンシー所属の他のタレント達にも立ち振る舞いのレッスンの依頼が入るようになった。

「…A・M、お前人に教えるの上手いな、ピン芸人以外にマナー講師としてもやっていけるな」とH・Gが言う

「…あのですね…准尉！自分は別にピン芸人になりませんから！…自分が入社した頃に准尉にビジネスマナーを教えられた頃は、それはもうグタグタでしたよ。会社辞めて准尉から教わったことが全くできていないことに気づいて、職を転々とし、その間に准尉から教わった『何事も基本・基礎が大事！どんな複雑な事も基本・基礎が理解できていれば、それらの組み合わせで対処できる』と言っていた事を思い出しながら復習して、ようやく安定した職場で働けるようになり、A国に行っても色々学ぶことができました。ここまで来たのも准尉の教えが基礎になったからです」

「…相変わらず、口だけは達者だな」

「いやいやいや、これは本心ですって！」

「巻き込まれ親父の厄災 Ⅱ 完 Ⅱ」